
MOON (k)NIGHT

あおやぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON (k) NIGHT

【Nコード】

N6706M

【作者名】

あおやぎ

【あらすじ】

「風も無く、虫もない、動物も息を潜めるような夜、そんな夜に、もし月が隠れていたら、絶対に外に出ちゃいけない。そんな夜には壁のお化けが出てくる」

壁のお化けと、それと戦う戦士のお話。

プロローグ

この世には、光と闇がある。それは、時に陰をもたらし、あるいは陰を取り去る。朝と夜という時間の流れもまた、光と闇の一つの姿である。

しかし、知っておかなければならないことがある。

光と闇は決して善と悪ではない。どちらにも善があり、どちらにも悪がある。

人は時に光を善とし、闇を悪とする。

だが心はそれが違うことを初めから知っている。

なぜなら心には、初めから光と闇があり、初めから善と悪があるからだ。

光と闇は単なる姿でしかない。

それを理解したとき、人は本当の意味で、善悪を理解出来るようになる。

プロローグ

深夜二時。この町で唯一二十四時間営業をしているダイナー「ムーン・ナイト」は、たとえ客がいなくても煌々と明かりを灯し、夜の闇を退けていた。窓から見える店内では、店主のヒトミがカウンタで雑紙を捲っていた。彼女が身につけているシャツやエプロンに

は店名である「ムーン・ナイト」のロゴが刺繍されている。小さな音量でクラシック音楽が流れている。今の時間、いつも設定しているラジオチャネルは大体、この手の音楽を流し続けている時間だった。ヒトミはそれが好きだった。誰もいない深夜。カウンタで一人、雑紙を捲りながらコーヒーを飲み、クラシック音楽を聞く。クラシック音楽という表現が正しいかどうか、いま流れている音楽がどんなタイトルで誰が作ったものなのかというのも、何も分からなかったが、彼女にとってこの時間は一日の疲れを癒す重要な時間だった。

雑紙のわきに置いてある愛用のカップが空であることに気づいたヒトミは、立ち上がり、二杯目のコーヒーを淹れようとした。

ドアのベルが鳴った。

「いらっしやい」

振り返ったヒトミは、一瞬遅れて微笑んだ。

「あら、どうしたのこんな時間に？」

「いえ……ちょっと、眠れなくて」

店にやって来たのは一人の男だった。ジーンズにパーカーという質素な出で立ちで、前髪は両目に掛かっており、声も小さく利発的な印象は薄い。しかし微笑んだ彼の雰囲気は不思議と人懐っこさがあった。右手にはギターケースのような幅のある大きなケースを持っていた。

「ちょうど話し相手が欲しかったところよ。コーヒーをご馳走するわ」

ヒトミは入口のわきに荷物を置いた彼を、カウンタに座らせた。デカンターに満たされたコーヒーを二つのカップに注ぎ、一つを彼の前に、もう一つをその隣に置く。小さな皿にナッツを少し盛って、それも置いた。ヒトミはカウンタの外に出て、彼の隣に座った。「変な夜ね。妙に静かだし」

ヒトミはスツールに座り、カップの持ち手を掴んでコーヒーを飲んだ。男はカップを両手で掴むようにして持ち「いただきます」と

言って、噤った。

「昔、おばあちゃんが言ってた。風も無く、虫もない、動物も息を潜めるような夜、そんな夜に、もし月が隠れていたら、絶対に外に出ちゃいけない。そんな夜には壁のお化けが出てくる、って」

カップを置いたヒトミは「月は出ていた？」と男に聞いた。

男はカップの黒い水面を見つめたまま「ええ」とだけ言う。

「そう。こんな夜は、静かにコーヒーを飲むに限るわね」

「どうして」

「え？」

「どうして、ヒトミさんのおばあさんは、そんな話を？」

ヒトミは苦笑しながら首を振った。

「分からないわ。おばあちゃんは、とても、なんて言うか、子供の扱い方がうまかったから。夜更かしする私を寝付かせるために、そんな話を言っただけだと思う。今でも覚えているぐらいだから、効果はあったみたいね」

「他にはどんな話を？」

「他に？ さあ……どうだったかな。あ、そうだ。ある時、私が、

その壁のお化けの話を聞いたとき、何か話してくれた気がする」

「どんな？」

ヒトミは笑った。

「こういう話、好きなの？」

「ええ、まあ」

「まあいいわ。えっと、なんだったかしら。そう、壁のお化けね。私が聞いたのは、もし壁のお化けが出てきたら、どうするの？ って、そう聞いたの。したらおばあちゃんは、こう言ったわ」

カップの縁を指で触りながら、ヒトミは真剣な表情で埋没した記憶を手繰るように、一つひとつ丁寧に話した。

「お化けが出てきたら、祈りなさい。戦士に助けを祈るのよ。お化けを倒せるのは、戦士だけ。戦士の宿命を背負った、戦士だけなの。確か……そう言ってた」

男は、静かにコーヒーを啜る。誰かに気づかれないように、隠れて何かを飲むように、彼の飲み方はとてもこそそしていた。

「変な話でしょ？」

ヒトミはカップを持ち上げて、カップの側面を見つめながら自嘲的に笑う。

「ずいぶん昔のことなのに、どうして覚えているのかしら」

「それはきっと、覚えていなくちゃいけないことだからじゃないですか」

「そうかしら？ ただの作り話よ」

「どんな真実も、直面しなければただの作り話ですよ」

「顔に似合わず、難しいこと言うのね」

ヒトミはナッツの皮を剥き、口に放った。

「今度は君の番」

「え？」

「昔話をして頂戴」

「僕の、ですか？」

「ええ。嫌なの？」

「いえ……ただ、どんな話をすればいいのか」

「子供の頃はどんな子だったの？ やんちゃだった？ それとも、引つ込み思案？」

「よく泣いていました」

「泣き虫、か。想像できるわ。どうして泣いていたの？ いじめられたとか？」

「いえ、怖かったんです」

「怖かった？ いじめっ子が？」

二つ目のナッツを食べるヒトミ。その間、男は三分の一程度コーヒーが残ったカップをずっと両手で包むように握んでいた。手を暖める保温機のようなものであると、思っているように。

「僕が怖かったのは、お化けです」

「お化け？ 怖がりの泣き虫さん、だったってことね」

「お化けは壁からやって来ます」

三つ目のナッツの皮を剥いていたヒトミの手が止まった。

「壁から？」

「風も無く、虫もない、動物も息を潜めるような夜、そんな夜に、もし月が隠れていると、彼はやって来る。壁から現れて、人をさらい、壁の中に引きずり込んでしまう」

ヒトミは臍を横にして、男の方を向いた。

「あなたも、同じような話をどこかで聞いたの？」

「聞きました」

「誰から？」

「深夜営業をしているダイナーの女主人から」

男はヒトミの方を向いて、微笑んだ。途端にヒトミは脱力する。

「なんだあ、冗談は止めてよ」

「面白かったですか、僕の作り話」

「面白くないわ。そんな冗談」

「すみません」

「もう……」

ヒトミはナッツを口に放り込み、苦笑した。

男は残ったコーヒーを飲み干して、席を立った。

「じゃあ、僕、もう行きます」

ポケットから小銭を取り出して、カウンタの上に置くと、ヒトミがそれを制した。

「ごちそうする、って言ったでしょ」

「いえ、いいんです。僕の話に付き合ってくれた、お礼です」

「そう……まあ、そういうことなら、ありがたく頂戴するわ」

「ごちそうさまでした」

男は微笑み、ドアへ向かう。ヒトミも彼を見送るためにスツールから立ち上がり、彼のためにドアを開けた。カラン、となったベルが流れ込む冷たい風をさらに冷たく感じさせる。

「重そうな荷物ね」

ケースを持ち上げた男に、ヒトミが言った。「ええ」とだけ返事をして、ヒトミが開けてくれたドアを通る男。

外に出た男がそのまま道を歩いていこうとすると、ヒトミは彼を呼び止めた。

「帰らないの？」夜空を指さしながら、ヒトミは言う。彼の住居がこのダイナーの上の階であることをヒトミは知っているからだ。

「ええ。少し散歩してから帰ろうかと」

「まあ、いいけど、風引かないようにね」

「はい。じゃあ」

「気をつけて」

ヒトミがそう言うと、男は会釈をしてそのまま街灯の乏しい道を歩いていった。

ドアを閉めようとしたヒトミが、ふと空を見上げる。

深夜の空。分厚い雲が星の光を遮っているのが見えた。

「月……出ないじゃない」

星と同じく月もまた、分厚い雲に覆われていた。

ヒトミはドアを閉め、カウンタに戻ると先ほどと同じように無人の店内でクラシック音楽に耳を傾けながら、余ったナッツをつまみ、コーヒーを飲み、雑紙を捲った。

いつもの時間が、過ぎていった。

朝九時。夜の闇が朝日に追いやられ、空が青く染まっていくにつれてダイナー「ムーン・ナイト」にも日常的な喧噪が訪れる。数時間前までカウンタでぼんやりとしていたヒトミも、今はカウンタの中でオーダーに従い忙しく料理を作っていた。

「カオリちゃん、これお願い」

カウンタに料理を置いたヒトミは、窓際の席でオーダーを取っていた女性従業員のカオリに声を掛けた。

「はい！」

夜間学校に通うカオリの日常は、朝、このダイナーでオーダーを取るから始まる。細身の軀にぴたりと張り付いたエプロン姿は、あどけなさが残るものの母性にも似た優しさが垣間見える。皿を持って、それを店内の一番奥、壁際の座席に座る男のもとへ運んだ。

「お待たせしました」

「……どうも」

座席に座っていたのは、深夜に訪れたあの男だった。深夜、この店に来たときに持っていた大きなケースは今は持っていないようだった。ただ基本的な服装は変わらず、色は違うもののパーカーとジーンズだった。前髪はやはり両目を覆っており、表情はよく分からない。

スクランブルエッグをフォークですくい上げ、丁寧に口に運び、入念に咀嚼する。彼の食事の仕方は、何かの儀式のように慎重だった。彼よりも後に来た客が、彼よりも遙かに早く帰って行く。「ごちそうさん！」という威勢のいい声が店内に響いた。店内にはそのほかに、ラジオから流れるパーソナリティの軽快で無害なトークが流れていた。時折、流行の曲が流れてくる。男女の恋愛を軽薄な言葉で歌った、極めて無害な歌だ。

「朝、早いね」

仕事が一段落したヒトミが、男の席までやって来てコーヒーを注ぎ足した。

「ええ、まあ」

男は皿に視線を落としたまま、返事をした。彼の言葉の全ては、朝の喧噪の前では煙のように瞬く間に消えてしまう。彼にとって、一般的な日常はうるさすぎるのではないか、とヒトミには思えた。彼には深夜の気味が悪いくらいの静寂がよく似合う。

「ごゆっくり」

コーヒーのポットを持ったまま、ヒトミはカウンタの中に戻っていった。

店内が閑散とし始めた頃、大柄な男が一人、やってくる。顔は日に焼けており、オーバーオールを着ている。その下のシャツは隆起した筋肉で今にもはち切れそうだった。

「おはようございます」とカオリ。

「おお、おはよう」

彼は店内をぐるりと見渡すと、黙ってカウンタの中に入っていた。そして簡単に手を洗うと、おもむろにカップを手にとってコーヒーを注いだ。そしてエプロンを身につけながら、カップのコーヒーを啜った。

「悪い。少し寝坊した」

「いいわよ、別に」

ヒトミは食器を洗いながら、ちらとその男を見て微笑んだ。

「後は俺がやるから、お前は帰って寝てろ」

「そう。じゃあ、お願い出来る？」

「ああ」

ヒトミが手を拭いている間に、男が代わって食器を洗い始めた。それが粗方終わった時、カオリが伝票を持ってカウンタにやってくる。

「アルゴンさん。これ、お願いします」

手を拭いていたアルゴンは「ああ」とだけ返事をして、カウンタに置かれた伝票を引つたくるようにして取った。

彼の屈強な肉体を初めて見た者は、彼をどこぞの無頼漢に思うかも知れない。しかしこの店はそもそも彼のものであり、この店を始めてからすでに十年以上の月日が経過している。この店がそれほど長い間営業出来ているのは、アルゴンの作る料理のいくつかが一定以上の評価を得ているからに他ならない。屈強な肉体とは裏腹に、彼の作る料理はうまい。不思議と、うまいのだ。それらは極めて庶民的な、取り立てて珍しいものではなく、また趣向を凝らしたものでもない。しかし町の人々の多くは、ここで一日の原動力となるエネルギーを補充してから仕事にいく。この町で、アルゴンとこの店

「ムーン・ナイト」を知らない者はほとんどいない。それに彼は、この建物のオーナーでもあった。二階より上は住居として貸し出しており、最上階が彼の住まいである。

「コーヒー、もらっていくわ」

「ああ」料理を作りながら返事をするアルゴン。

ヒトミは自分で愛用のカップにコーヒーを注ぐと、それを持って奥に座っている男の所へ行く。

「座っても？」

「ええ」

男の向かいに座ったヒトミは、コーヒーを両手で包むようにしてひっそりと啜った。

「昨日、あの後、どこへ行ったの？」

ヒトミは首を横へ向けて窓から見える景色に視線を馳せながら、コーヒーに息を吹きかけるように話した。

男の食事は終わっており、目の前にはソースだけが残った皿がぽつりと置いてある。コーヒーを一口飲み、男は「ぶらりと」だけ言う。

「ぶらり？」

ヒトミはそう言って少し笑った。視線は外を向いたままだ。

「そつえば」

彼女は視線を前に戻し、カップをテーブルに置いた。縁を指で撫でながら、ちらりと上目遣いで彼を見る。

「月が出ていなかったわ」

カップを持ち上げようとした男の手が、止まった。だがすぐに動きだし、コーヒーを飲んだ。

「あなた、月が出てるって言ったじゃない」

「そうですか」

その「そうですか」はどのような意味があるのか。単なる相づちなのか、語尾に疑問符が付くのか。ヒトミには分からなかった。ため息のような息づかいを一度。それ以降、ヒトミはコーヒーが飲み

終わるまで何も話をしなかった。

空のカップを手にして、ヒトミは立ち上がる。「じゃあ、おやすみなさい」と言って、彼女はカウンタにいるアルゴンにカップを渡すとカオリに手を挙げて、店を出て行った。

彼女の一日は、朝、これから仕事に行く人々の食事を提供することと終わりを告げる。次の彼女の一日が始まるのは、太陽が沈み、月が昇り、町がしんと静まりかえる時である。

店内にいる客は男だけとなった。空いた皿は片付けられ、今は半分ほど残ったコーヒーだけがぽつんと置かれていた。カオリはカウンタに座り、客のために置いてある雑紙を捲っていた。アルゴンはカウンタの中で椅子に座り、煙草を吸っている。店内のBGMは先ほどと同じパーソナリティの軽いトークだった。

男は半分だけ残ったコーヒーをそのままに、置かれた伝票を持って席を立った。

「あ、ありがとうございます」

カオリがさつと立ち上がった、彼から伝票を受け取るとレジで会計をした。

「どうもありがとうございました」

カオリが頭を下げると男は「どうも」と会釈をして、店を出て行った。ベルが鳴って、店内は昼前に訪れる一時の静寂に満ちた。

男の一日もまた、この時間に終わりを告げる。彼の一日は、ヒトミを見送り、店内に客がいなくなったときに終わるのだ。次に男の一日が始まるのは、風も無く、虫もない、動物も息を潜めるような夜。そんな夜にもし月が出ていなかったら、それが彼の一日の始まりである。

第一夜 月夜

その日の夜は、月が煌々と夜空に光り、まるで暗い夜空に大きな穴が穿たれたようにすら見えた。それは男の部屋からでも容易に確認出来た。

男の部屋に無駄なものは一つもない。クローゼットには同じような色のパーカーがずらりと並んでおり、それはジーンズや肌着にいつでも同じだった。壁際には簡易式のベッドが置かれている。テーブルを始めとする本来あるはずの家具の類はベッドを除いてほとんど見あたらない。床に直接置かれた本は、いくつかの塔となって床から生えていた。男はベッドに座り、壁に背中を預けてその本のうちの一冊を読んでいた。表紙は無く、タイトルも見えない。中身は一見しただけでは判読出来ないほどに細かな文字が横書きでびつしりと印刷されていた。紙の周囲は色あせていて茶色くなっている。天井にある蛍光灯が、じりじりと時折鳴く。その音以外、部屋にある物音といえば、彼がページを捲るときの紙のこすれる音だけだ。息づかいすら聞こえてこない。

クローゼットとベッド、そして本の塔。これだけしかない男の部屋で、不自然なほどに存在感を放っているものが一つだけある。部屋の中央に鎮座しているそのものとは、大きな黒いケースだった。直方体のケースは長さが二メートルほどあり、厚みもある。見るからに重そうで、まるでそれそのものが金属の固まりであるかのように無機質だった。このケースから静寂が放たれているようにすら見える。

「お前は、今までの戦士の中でも一際孤独な男だ」
前髪に隠れた男の眉がぴくりと動いた。視線が本から一瞬だけ黒いケースに動く。しかしすぐに本の文字に視線が戻る。

「月夜の晩ほど、お前の孤独が浮き彫りになる時はない」
ページを捲る。再び男の視線が文字を追う。小刻みに揺れる視線。

「だが、孤独であればあるほど、そしてそれを受け入れるほど、お前は戦士として成長していく」

男は目を閉じた。何かを追い払うように、強く目を閉じた。

「お前はその本を何度読んだか。それでもなお、ページを捲る。この本の山は、お前の孤独を象徴しているな。あらゆる優しさを拒み、ひたすらに自分の内側に沈み込んでいくお前の生き方は、まさしく戦士そのものだ」

男の目は依然として閉じられたままだった。

「お前は、戦士となるべくして生まれた。間違いなく、な」

男は目を閉じたまま、本を閉じた。

その時、インターホンが鳴った。

男はベッドに座ったまま、ドアの方を見た。そして忌まわしいものを見るような視線で、黒いケースを一瞥する。

本をベッドに置き、立ち上がる。黒いケースの横を通る時、彼は呟いた。

「黙ってください」

その言葉は冷たく凍てついていた。

ドアを開ける。

そこに立っていたのはアルゴンだった。右手に酒のボトルを持ち、左手には小さなグラスを二つ持っていた。

「飲まないか？」

しばらくの静寂。アルゴンは何かを察したように「嫌ならいい。

邪魔した」と言って踵を返そうとした。だが男はすぐに「いえ、飲みます」と答えた。

「そうか。今日は月が綺麗だ。屋上でどうだ」

「ええ」

男は部屋を出た。鍵を掛け、アルゴンの背中を追って屋上へ向かった。

屋上に出ると、冷たい風が二人を出迎えた。月は綺麗に夜空に浮かんでいる。屋上には何もない。ただ周囲を胸ほどの高さの柵が巡

っているだけだった。アルゴンからグラスを受け取り、男は酒を注いでもらった。アルゴン自身も自分のグラスに酒を注ぐ。舐めるように一口飲み、アルゴンはボトルを足下に置き、大きな臍を柵に預けた。

「別に何かを詮索するつもりはない」と前置きして、アルゴンは話し始めた。男は酒の入ったグラスを手を持ったまま、アルゴンの視線を受け止めた。

「家賃は間違いなく振り込まれているし、誰かに迷惑を掛けることもない。前にお前の部屋に住んでた奴は、夜な夜な大音量で音楽を垂れ流すような糞野郎だった。その前は毎日毎日違う女を部屋に招き入れて、遊び呆けている奴だ。家賃の滞納もあった。この町にはいい奴もいるが、ろくでもない奴もいる。そんなろくでもない奴に比べたら、お前は遙かにマシだ。ヒトミもお前を気に入ってる」

グラスの酒を一息で飲み干したアルゴンは、足下のボトルを手にとって再びグラスに酒を注ぐ。

「だが、心配もしている。ヒトミも、俺もだ」

ボトルをまた足下に置いて、アルゴンは後ろを向いた。男からはアルゴンの大きな背中が見えた。その背中を見ながら、男は乾いた唇を湿らすように、グラスの酒を少しだけ口に含んだ。

「お前がここに来たとき。いくつかの書類を書いてもらった。入居に関する形式的な書類だ。そこに書いてあることは、全てデタラメだった」

グラスのつまむに持ち、満たされた液体を回すように揺らす。アルゴンの視線は揺れる琥珀色の液体に向けられていた。

「気を悪くしないでくれ。別にそれを責めるつもりはないんだ。それに、出て行けと言っているわけじゃない。今言ったが、ヒトミはお前を気に入っているし、俺も同じだ」

男はグラスを持ったまま、それとなく歩みを進め、アルゴンの隣にやってきた。背中を預け、天を見つめた。

「俺達には子供がいない。昔、一度出来たことがあったが、事故で

死んだ。もう二十年以上前の話だ。俺もあいつももう若くない。今更ガキが欲しいとか言うつもりはないが、もしあのまま生きていたら、今頃、丁度お前ぐらいの歳になっていた。だからなのか、ヒトミはいつもお前を気に掛けている」

こみ上げる何かを隠すように、アルゴンはグラスを仰いだ。

そして、隣にいる男の方へ視線を向けた。

「お前は……何者なんだ？」

男はアルゴンの視線を感じたのか、夜空に向けられていた視線を一度グラスに落とし、それからアルゴンの方を向いた。アルゴンの表情はいつもと変わらず、仏頂面だった。顔に刻まれた皺が、彼の年齢を物語っていた。

「どうやって金を稼いでいるんだ？ 真夜中にどこかへ出かけているらしいじゃないか。何か仕事をしているのか？」

男ははにかんだように微笑んだ。その表情の変化をアルゴンが気づいたかどうかは分からない。男はグラスの酒を一息で飲み干すと、空のグラスを見つめて、それからそれをアルゴンに突きだした。

「ごちそうさまでした」

アルゴンは男からグラスを受け取った。

「おやすみなさい」

男は小さく頭を下げて、立ち去っていく。

アルゴンは彼の背中を目で追った。彼が立ち止まり、何かを話してくれるのではないかと、という期待が込められた視線だった。

しかし、男は最後までアルゴンに振り返る事はなかった。ドアを開けて、踊り場に向かい、階段を下りていく。彼の背中が階段の下へと吸い込まれていく途中でドアが閉まった。

アルゴンはため息をついて、夜空を見上げた。

屋上でアルゴンと酒を飲んだ日の翌日。

男は昼間に外出をした。

外出時には、外出用のパーカーを着る。だがその違いが分かるのは本人だけで、端から見ると外出用も室内用も結局は同じものに見える。

階段を下り、男はダイナーの横を通る。ちらと店内を見ると、アルゴンとカオリが働いているのが見えた。客も半分ぐらいいる。視線をすぐに前に戻し、男は歩いた。パーカーのポケットに両手をつ込み、前髪で覆われた目で彼は自分の足下をじっと見ていた。

ダイナーのある通りは一応、商店街と言われている。だがどこも基本的には寂れていて、客の顔ぶれは毎日同じだった。それはダイナーも変わらない。繁盛している、という言葉はこの町では無意味な言葉だった。新しく店が開店することは稀なことで、どの店ももう何十年も営業している。飲食店はダイナー「ムーン・ナイト」の他に何軒がある。レストランのような店や、持ち帰りが出るカフェ、異国の料理を出す店もあった。それらを左右に見ながら、男は商店街をずっと歩いていく。

途中、商店に品物を搬入していた屈強な男がパーカー姿の彼を見て声を掛けてきた。「おう」とか「やあ」とかそういう類の挨拶だった。彼はダイナーの常連客で、男のことを知っていた。

「お前、アルゴンとこの奴だろ？ どうしたんだ、こんな時間に」男は会釈だけをして、何も言わずに通り過ぎていった。背後で屈強な男は首をすくめて「陰気な野郎だ」と苦笑しながら言う。悪意は感じられない。

「この先は行き止まりだぞ」

歩いていく男の背中に言葉をぶつけて、彼は再び搬入作業に戻った。

商店街を抜けると、しばらくは人気のない通りが続く。周囲の建物は大体が民家だったが、中には空き家もあり、ぽつんと何も無い空き地も現れる。空き地では放棄された建築資材を使って子供達が遊んでいた。土管に隠れたり、資材の上から飛び降りたりしていた。

それらがどのようなルールのもと行われているのかは、ここからは分からない。

それらを横目にさらにしばらく歩くと、道路に赤いコーンが現れる。コーン同士は長い棒で繋がれており、そこに手製の看板が据え付けられていた。

立入禁止 この先 行き止まり 通り抜け不可

男はそんなものの存在など全く気にとめず、コーンを跨いで歩き続ける。ダイナーからここへ来る間、彼は一度として両手をポケットから出さなかった。

コーンを跨いで五分ほど行くと、目の前に大きな壁が現れた。そこがこの町の終着点である。人々はここを単に『壁』と呼び、これといった名称は存在しない。しかし『壁』とは言うものの、見上げてもその先は雲の中に吸い込まれており、左右を見ても男がいるところからでは終わりが見えない。三方向に永遠と伸びている、と思えるだけの巨大な『壁』だった。この『壁』が実際にどれだけの大きさなのか。それを知る者は誰もいない。誰も、ここには寄りつかないのだ。ここには何もないし、ここから何かが生まれることもない。少なくともこの町に住む人々はそう思っている。

壁には落書きがされていた。スプレーで描かれた奇怪な絵や、デザインされた文字が大きくダイナミックに描かれている。ドクロマーカーや女体をイメージして描かれたものもあった。男はそれをしばらくの間、見つめていた。

「ここに人がいるとは、珍しい」

じつと壁を見つめていると、男の背後から老人が一人、杖をついてやってきた。いつそこに現れたのか分からないほど、老人の出現は突然だった。

男は振り返ることもなく『壁』を見上げ続けている。老人はそんな彼の横に来て、彼と同じ方向を見た。

「かつて、人々はこの壁を恐れていた」

「……」

男は特に話を促すことをしなかったが、老人はそんなことなどまるで構うことなく「なぜ恐れていたかといえば、それは壁から魔物が出てくるからだ」と話を続けた。そして老人は踵を返し、まるでそこに捨てられているような古いベンチに腰掛けた。杖を両足の間につき、杖の上に両手をのせて『壁』を見上げる男を見つめた。

「魔物は人を壁に引きずり込み、壁を大きくしていった。壁が巨大化することの意味を人間が理解することは出来ない。それは魔物にしか分からない、特別な理由なんだ。この壁は、引きずり込まれた人間の血と肉で出来ている。私の妻も、この壁のどこかに埋まっているんだ」

老人は男に向かって話しているが、男が一切反応しないため、会話は成り立たない。独白に近い老人の言葉は、孤独に染まり霧散していく。

「もう何十年も昔のことだ。その年は、不幸にも戦士のいない年だった。妻のいなくなった日は風のない夜だった。しんと静まりかえり、動物たちも息を潜める。そして、月は雲の向こうに隠れている、そんな夜だった。魔物の存在が迷信となり始め、妻も魔物を信じなかった。だが、私はたとえ彼女が嫌な顔をしても、魔物の危険性を話した。壁には決して近づくな。そして、風もなく、動物たちも息を潜めるような夜。もしそんな夜に遭遇したら、月を見る、と。月が隠れていたら、全ての用事を無視して家に帰ってくるんだ。そう言った」

男は『壁』を見つめることをやめていた。どこを見ているのか分からないが、老人からは彼が俯いているように見えた。

「月光に神秘的な力がある、とは思わない。だが、どんなものであっても苦手なものがある。私はピクルスが嫌いだ。妻は寒い日が嫌いだ。黒いものが嫌いだ。食べ物でも、洋服でも、何でもだ。同じように、魔物は月が苦手だったんだ。それだけのことだ」

老人は空を見上げた。そこには青空に真っ白な雲が絶妙なコントラストで浮かんでいた。太陽は背後から生命力に溢れた光りをもた

らしている。風は穏やかで、人間を優しい気持ちにさせた。耳を澄ますと、しんと静かな音が聞こえてくる。

「魔物は誰にも倒せない。人間を始めとする動物は、魔物に見つからないように息を潜めて隠れているしかない。だが、その日、妻は私の言葉を忘れてしまった。仕方のないことかも知れない。私は人格者と言われていたが、一方では古い風習に取り憑かれた頑固な男だとも言われていた。魔物とは何かの暗喩であり、実際に怪物が現れるわけではなく、夜道には気をつけるという教訓に過ぎない。現実的な妻は、私が魔物の話をする度にそういつて反論した。真夜中、私は眠れずにリビングで酒を飲んでた。グラスを見つめてみると、外がいやに静かであることに気づいた。妻は帰ってこない。仕事で遅くなると電話があつてから、もう何時間も経っていた。結局、妻は朝になつても、次の日になつても、何年経つても帰ってくることは無かつた。私は、その日、リビングで酒を飲んだ時に悟つたよ。妻とはもう会えないんだ、と」

しばらく、静寂が続いた。老人は雲の動きを見つめていた。男が砂利を踏む音がして、老人の視線が男に移った。

男は壁をぐるりと見渡すと、ある部分を指さした。

「奥さんは、この辺にいます」

老人はベンチから立ち上がり、杖をついて男のそばに歩み寄った。そして、男の示す場所を遠い眼差しで見つめた。皺だらけの手を伸ばし、壁を愛撫するように指先でその部分をなぞった。

「ここに……いるのか」

「正確にはこの奥、です」

「ここを掘れば、妻に会えるのか？」

「それは無理です」

「……そうか」

「魔物は人間の血と肉で壁を作った後、残った骨を食べます。だから、壁をどれだけ掘つても、出てくるのは土塊のような血肉だけです」

男の言葉はぼそぼそとしていて、ちよつとでも周りがうるさかつたらすぐにもかき消されてしまうような声だった。だが、今の場は、老人に男の言葉を聞かせるため何者かが配慮したかのように、果てしない静寂が漂っていた。だから老人も、男の言葉を一つとして余すことなく聞くことが出来た。

「若いのに、君は魔物の話を知っているのか？」

老人が問いかけると、男はぴたりと話すのを止めた。それは単に黙っただけではなく、彼から言葉そのものが欠落してしまったかのように絶対的な無言だった。

「なぜここに妻がいると分かる」

男は無言のまま、『壁』を手の平で押さえるように触った。

「もしかして君は……戦士なのか」

『壁』に押し当てた手を平行に移動させ、それに合わせて男は『壁』に沿ってゆっくりと歩き出した。

「戦士なのか？ 月の剣を携えた、戦士なんじゃないか？」

男の背中に老人は言葉をぶつけた。だが男の歩みは止まらずに、遅々とした速度ではあるものの、前に進んでいく。『壁』に沿って片手を『壁』に押し当てたまま。

「どうして……どうして私の妻なんだ」

男の歩みがぴたりと止まった。

「どうして妻が……彼女は誠実で、誰に対しても優しく、清らかな人間だった。なのにどうして」

何十年も押しとどめてきた感情が、老人のど元から溢れ出てくる。老人の躰はかすかに震えていた。彼の怒りや悲しみが交ぜになった強い感情の放流は、長い年月を経て変化し、それはもはや吐き出すことが出来ないほどに性質を変えてしまっているようだった。さらにいえば、それらの感情を吐き出すには、老人の躰はひどく弱りすぎていた。

「魔物にとつて、人間は人間でしかありません。それは僕達だって変わらないんじゃないんですか？」

「どういう意味だね」

「深い意味なんてありません」

「戦士の言葉を聞きたいんだ。答えてくれ」

「戦士であるかどうかなんて、何の意味もありませんよ。死は、特別なことじゃない」

「納得出来ん。妻は優しく、私の孤独を癒してくれるただ一人の人物だった。それを魔物が奪ったんだ。私から、最愛の妻を」

「大丈夫」

「……何が、大丈夫なんだ」

男は『壁』から手を離し、勿体ぶるような速度で振り返った。前髪に隠れた彼の視線が老人を見つめた。

「あなたももうすぐ死にます」

「なんだと……それが、それが戦士の言葉か！」

老人の怒号が青空に消えていく。

先ほどよりも一層濃い静寂が、辺りに立ちこめた。

「それが……戦士の……」

「では、なんて言えば良かったんです？」

首をかしげる男に、老人の鋭い視線が向けられる。だが、何を言うべきか老人にも分からない。怒りをぶつけようにも、感情だけが湧き上がるばかりで言葉に還元できない。わなわなと震える躰。杖を握りしめる手に力が込められる。

「世界は多かれ少なかれ残酷さで成り立っています。近しい誰かを亡くした人はあなただけじゃない。あなたはそれを理解するべきだ」

男はパーカーに両手をつ込み、最後に壁を一瞥すると、来た道を戻っていくために歩き出した。彼の動きを追う老人の視線は依然として厳しい。

「戦士は、人間の味方じゃないのか」

老人の言葉が、立ち去る男の足を止めた。

「人間の味方になれるのは、人間だけです」

男がその場を立ち去った後も、老人はそこに残留した男の影のよ

うなものをずっと睨み続けていた。

青空に広がる雲が、次第に多くなっていく。

先ほどまで清らかだった風が、どこからか不吉な匂いを運んできた。

老人の眼から、何年かぶりの涙がこぼれ落ちた。長い年月の間に刻み込まれた顔の皺に、涙が染み入っていく。

嗚咽を飲み込むように、老人は泣き崩れた。

妻の死を、彼は初めて実感した。

第二夜 無月

太陽が沈み、月が昇る。だがその日、月は雲に隠れていた。冷たい風が生き物を拒むようにデタラメに吹いた。警告を含んだ冷たい拒絶の風だ。

自宅で本を読んでいた男は、風が窓枠を揺らす音を聞くとともに聞いていた。ページを捲る音も、吹き抜ける風の前では無音に等しい。男の視線は機械的に左右に動き、文字の羅列を追いかけた。

部屋にある時計の長針と短針と秒針が丁度一つに重なった瞬間、風が突然ぴたりと止んだ。同時に男が本を閉じた。無音の合図があったかのように、男は立ち上がる。本を置き、深く息を吐いた男は、部屋の中央に鎮座している黒いケースを持ち上げ、部屋の電気を消して、外へ出た。

この町は人間で成り立っている。それはつまり、町から人間を消してしまえばもう何も残らない、ということだ。多かれ少なかれ、人の住む場所というのは人の存在で成り立っているのだろうが、この町では特にそれが顕著であるように感じる事が出来た。言い換えれば、歴史が希薄であるということだ。ここには過去に住んでいた人間の残影が希薄なのだ。同時に、この町の人々は未来について強い期待を抱いていない。それがこの町の希薄さに拍車を掛けていた。何かを残そうとか、何かを伝えようとか、何かを継承しようとか、そういう考えを持つ者はこの町では少ない。人々は良くも悪くも、その日暮らしを謳歌していた。

階段を下りて商店街に出ると、点々とだらしない破線のように続く街灯が商店街をぼんやりと照らしていた。だが、力のない明かりは闇を一層色濃くしてしまっていた。ただ一つ、ダイナーの明かりだけが、煌々と店内とその周囲の闇を退けていた。旅人を導く月明かりのように、この店の明かりは眩い。

「出かけるの？」

ダイナーの店先にはヒトミが立っていた。コーヒーの入ったマグカップを持っていた。

「ええ」

「コーヒーは？」

持っていたマグカップを少し持ち上げる。男はゆっくりと左右に首を振った。

「そう」

持ち上げたマグカップと男を交互に見つめ、彼女はコーヒーをすすった。

男は特に何も言わずに、ヒトミの前を通って商店街を歩いていった。彼の背中を見つめ、彼がもう自分の声の届かない距離まで遠ざかるのを見届けると、店の中へ戻っていった。

夜の町には、何かしらの哀しさが漂っている。この町だけではなく、全ての町に共通していることだ。多くの人が眠っているためか、夜の町という場所には躍動的なものは何一つない。しかし、本来そこには風があり、夜行性の動物が活動をし、月がそれとなく世界を照らしている。

今、それら全てが消えていた。

そのせいで、町には死の匂いが充満していた。男にしか分からない、不確かな匂い。たとえようのない匂いは、風のない世界でどんなよりと地面近くに漂っている。重苦しい雰囲気と共に、男の足に絡まるように。

立入禁止の札を跨いで、男は『壁』の前にやってきた。

誰もいないはずのそこには、珍しいことに先客がいた。

「やはり君か……」

そこには昼間会った老人が、壁に片手を添えながら立っていた。肩越しに男を一瞥すると、すぐに壁に視線を戻す。

「警告に従う者がいれば、それを拒む者がいてもいい。そう思わないか？」

老人の独り言を無視して、男はケースを地面に縦に置いた。その

動作は、ケースを地面に突き刺すような動作だった。

「そのケースに、月の剣が入っているのか」

ケースは自然に開いた。両開きの扉のように、あるいは仏壇のように、厳かに音もなく開く。開かれた部分に右手を差し込んだ男は、その姿のままじつと何かを待つように硬直した。

「今日は魔物が現れる夜だ。あれだけ強かった風が止み、月は雲に隠れている。こんな夜は、誰も外には出ない。魔物を信じない者でも、本能的にこんな夜は忌み嫌うものだ。だが、私はそれに逆らった。本能が発する警告に逆らい、歩みことを拒む身に逆らい、私は……ここに来たんだ」

老人の表情は穏やかだった。暗くてそれを確認することは出来ないが、彼は彼にしか分からない穏やかさを表情に反映していた。しかし。

『壁』が突如として蠢き始めると、老人の表情は一辺した。触れていた手を離し、一歩二歩と後ずさる。蠢く『壁』は、水面のような波紋を生じさせ、そこから何かが突き出ていた。それは次第に手の形に変わり、次に足が現れ、人間の半身が壁から現れる。

「こ……これが、魔物か？」

何かの呪縛から逃れるように、『壁』から出てきた魔物は残り半分の身を『壁』から引きずり出した。

「お、お前……」

老人の表情から驚きや恐怖が薄れ、何かを疑うような表情に変わった。

『壁』から出てきたのは、長い髪の女性のようだった。女性のよう、と表現するのは、それが全身茶色に染まっており、ディテールが酷く曖昧だったためだ。だが髪が長く、全体として華奢な体つきをしており、胸部にささやかな膨らみを携えていたために、これが女性であると想像出来た。

「どうして……お前が」

老人の表情は再び驚きに変わり、同時に懐かしさや嬉しさのよう

なものも現れ始めた。

男はケースから右手を引き抜いた。

引き抜いた右手が掴んでいたものは、漆黒に染まった何かだった。それは老人の言葉を借りれば、確かに剣のようにも見えたが、細部は夜の闇に紛れてしまい境界が曖昧となっているために不鮮明だった。鈍器のようにも見える。確かなのは、それが男の背丈よりも遙かに巨大で、重そうだということだけだ。

男はケースから物体を引っ張り出すと、それを引きずるようにして移動した。

「どいてください」

老人に向かって男が初めて発した言葉は、ひどく冷たいものとして周囲に響いた。けれど老人には一切聞こえていないようだった。老人は杖から手を離し、両手を前に出して、『壁』から現れた人型の何かに縋るように歩き出した。杖が地面を転がった。

「お前か……お前なのか」

男は老人の肩を掴んだ。しかし老人はその手を臍をよじって払う。

「離してくれ！」

「どいてください」

「黙れ！」

老人は遅々とした速度で前に進む。

『壁』から現れたものは、じつと動かずに立っていた。

「私だ。覚えているか？ 私は、お前の帰りをずっと待っていたんだ。もう何十年も、ずっとだ。やっと、やっと会えた……」

男は舌打ちをした。彼が感情を表に出した、数少ない瞬間だった。

男は老人の肩を掴み、老人が嫌がるのを無視してその場から引き剥がすように後ろに引いた。よろめく老人を尻目に、男は持っている巨大な何かを振り上げた。

「やめろ！ やめてくれ！」

巨大な何かが『壁』から現れたものに振り下ろされる。不気味な音が響いた。

ノイズのような絶叫が一瞬、激しくこだまして、すぐさま周囲は静けさを取り戻す。真つ二つに両断されたそれは、蛍の光のような淡い光りを放つ粒子となって、空に昇っていった。

老人は男の横を駆け抜け、地面に倒れ込むと、光りの粒子を両手でかき集めようとあがいた。手を伸ばし、飛散していく粒子をつかみ取るうともがきながら「行かないでくれ！ 私を一人にしないでくれ！」と叫んだ。

ただよう光りの粒子は辺りの暗闇を不思議と鮮明に追いやった。

男の持つ巨大な物体の輪郭がその光りによって露わになった。それは、いわゆる一般的に言われる剣の形はしておらず、一切が黒に染まっている緩やかな弧を描いた巨大な物体で、まるで三日月に持ち手がついたような形をしていた。しかし、光りの粒子が消えると同時に、黒い三日月は輪郭を曖昧に夜の闇にとけ込んでしまう。男はそれを引きずって、ケースに元あったように収めた。

「どうして殺してしまった……私の妻だった。あれは間違いなく、私の妻だったんだ。なのに、どうして殺してしまったんだ！」

三日月的物体を収めると、ケースは、絶対に開くことはないという誓いを立てたように自然と閉まった。

「どうして殺したんだ！」

「あなたの奥さんは、ずいぶん昔に死んでいます」

「いや、生きていた！ 今、ここにいた！ お前も見ただろう！」

あれは間違いなく私の妻だった。それを、お前は、私の目の前で、殺したんだ！ その剣で！」

老人はケースを指さした。

「これが戦士のすることか？ ええ？ どうなんだ！」

男はケースをゆっくりと横倒しにして、それから取っ手を持ってケースを持ち上げた。

「答える！ これが戦士のすることなのか！」

「そうです」

「目の前で、最愛の人を殺すことが、戦士のすることだと、そうい

うのか！ 私は断じて信じないぞ。戦士がこんな残酷なことをするはずがない。戦士は常に人の側に立ち、人の心を察し、人のために剣を振るう。お前は、断じて戦士などではない！」

ケースを持った男は、暗闇に紛れて肩越しに老人を見た。光りの粒子が消えたその場所で跪き、そこにまだ何かの痕跡があるかのように、老人は決して動こうとしない。しかし、老人はかつて無いほどに激昂していた。老人自身も驚くほどに、怒り狂っていた。

「お前が戦士だというのなら、今ここで、私を殺してくれ！」

「……それは出来ません」

「なぜだ！ 私の心が分からないのか！？」

「あなたがさつきから言っているじゃありませんか」

「何だと？」

「戦士だからです」

男はケースを持って、その場を去っていった。

老人は依然としてそこに跪いたまま、為す術もなく、悲しみに打ちひしがれていた。

風が戻ってきた。それに応じて、雲が流れ、雲間から月が現れる。月の優しい光りを内包した風が、老人を慰めるように吹き抜けた。

しかし、もはや老人にとって、月があること、風があること、それらは一切の意味を持たなかった。

さらに言えば、老人には、生きていることさえ、もはや何の意味も持たなくなってしまうた。

朝。男はいつも通り、ダイナー「ムーン・ナイト」で朝食を摂っていた。ヒトミがカウンタの中で料理を作り、カオリがそれをテーブルに持って行く。それらを見るときもなく見ながら、男はコーヒーをブラックのまま飲み、スクランブルエッグをフォークですくい上げて口に運ぶ。付け合わせのサラダも食べる。そのようにして皿を

空にして、カオリが注ぎ足したコーヒーを飲んで一息つく。その頃になると、店内は朝の喧噪が過ぎ去り静かな時間が静かに過ぎていく。

アルゴンがやってきた。彼は店内の奥に座っている男を一瞥すると、ヒトミと二三言葉を交わして、エプロンを身につけてカウンタに入る。ヒトミはアルゴンと入れ替わりにエプロンを外して、自分のためにコーヒーを淹れて、男のもとへやってくる。そして男の向かい側に座り、ゆっくりとコーヒーをすすめるのだ。

いつもと変わらない時間が過ぎていた。もう何十回、何百回と遭遇した時間だ。窓の外では朝日の煌めきが降り注いでいる。空は青く、全ての穢れを落としてくれそうな聖なる何かを感じる。

ドアが乱暴に開かれたのは、そんな時だった。

「大変だ！」

アルゴンは洗い物の手を止めずに、顔だけを入口の方へ向けた。彼の代わりにヒトミが躰を入口に向けて「どうしたの？」と聞いた。店内に入ってきたのはこの町の住人で、ダイナーの常連でもあった。作業服を着ていたのも、これから仕事をしようとしたのだろう。胸元に社名が刺繍されていた。運送業か、工場の作業員か、工事現場の作業員か、それはよく分からない。年齢は三十代といったところだろう。

「ラオじいさんが……死んだ」

アルゴンの手が止まった。ヒトミが立ち上がり「嘘でしょ？」と問いただす。しかしその言葉は言葉通りの意味ではなく、自分に向けられたものだった。信じられない、といった意味の自問の言葉だ。「本当だ。いま、救急車で運ばれていった」

「なんで死んだんだ」

アルゴンが手を拭きながら、カウンタから出てくる。

「俺もちゃんと教えてもらったわけじゃないが、どうも自殺らしい。朝、隣に住んでる婆さんが部屋に入ったら、首を吊っていた、って言うってたのをちらっと聞いた」

「自殺……」

「警察が来て、これから色々調べるらしい」

「どうして自殺なんて」と言ったのはカオリだった。

「奥さんを亡くして、結構精神的にきつかったみたいだから、それが原因なんじゃないかって。壁に飲み込まれたとか、魔物に誘拐されたとか、確かそんなことをよく言ってたよ。たまに、町の外れにある『壁』をぼうつと見てたりしてるって……」

作業服の男はまくし立てるように話した。かなり興奮しているのだろう。

ヒトミは淹れたばかりのコーヒーをテーブルに残したまま、作業服の男と話していた。そこにアルゴンも加わり、話の内容は何かを相談するようなものにならなっていた。時折聞こえてくる単語に「葬式」や「家族」などがあつた。あるいは「かわいそう」や「大変ねえ」といった同情的な単語も聞き取れる。

男はコーヒーを飲み干して、席を立った。カオリがそれに気づいて、男に駆け寄ってくる。カオリに代金を渡して、男は店を出ようとした。

ヒトミやアルゴンは、店を出て行く男には気づいていないようだった。

店外に出た男は、真つ青な空を見上げた。

ただよう純白の雲。青く輝く空。太陽の暖かな光り。

男の視線がどこを向いているのかは、前髪に隠れているせいよく分からない。しかし、顔の向きは間違いなく空へ向けられている。「ほらね」

表情に変化はない。

男の呟きに気づくものは誰もいない。

たとえ彼の隣に誰かがいても、分からなかっただろう。

もしかするとその呟きは、呟きですらなく、単に彼の心の中の思いだったのかもしれない。

男はダイナーの脇の階段を上り、自分の家へと帰っていった。

一週間後。

その日は朝から雨だった。

ラオじいさん、と呼ばれた老人の葬儀がしめやかに営まれた。

葬儀は近しい者達だけでひっそりと行われたらしいが、男にとつてはどうしてもよかった。葬儀のせいか、町全体がしんと静まりかえり陰鬱な雰囲気満たされた。降りしきる雨もまた、その雰囲気を加速させる一つの要因といえるだろう。

昼間になっても雨は止まず、絶え間なく一定のノイズを町中に響かせていた。店が閉まっているせいで、町は死んでしまったように静かだった。ただ雨音のノイズだけが町にこだまする。

男は自宅にいた。

外出する用事もなく、本を読むわけでもなく、ベッドに座り、窓を流れる雨粒の集合体をじっと見つめていた。

ダイナーでラオじいさんが死んだという話を聞いてから今日までの間に、男は何度か『壁』を訪れていた。しかし、一度としてあの老人に会うことは無かった。

昨日、ダイナーで食事をした時、ヒトミが遺書存在を男に教えてくれた。

「戦士に絶望した。そう書いてあったらしいわ」

その言葉の意味を知るものは、この町には誰一人として存在しない。

仮にあの時の老人がラオじいさんであるならば、遺書にあった言葉を言葉通りの意味として受け取るのは、男にとって難しいことではなかった。自分の振るまいが、あの老人には受け入れることが出来なかったのだろう。

「戦士として、お前は成すべき事をした。気に病むことはない」

頭の中に響く言葉は、男にとって邪魔以外の何者でもなかった。

静かにして欲しい。男は言葉には出さなかったが、そう思っていた。「古来より、人と戦士の関係は必ずしも友好的なものではない。戦士という宿命の性質上、時として人との間に軋轢が生じることもある。今回のことは、その際たる例だ。『破片』は、標的となる人間の心に付け入り、幻覚を見せる。戦士はその幻覚を断ち切り、『破片』を碎かねばならない。お前は、それを全うしたんだ」

戦士に絶望した。

恐らく、あの時、老人が壁に引きずり込まれるのを黙ってみていればよかったのだろう。しかし男は魔物を叩き斬った。今も部屋の中央で鎮座している黒いケースの中にある、三日月のような何かで、碎いた。

「戦士の宿命から逃れることは出来ない。お前は死ぬまで、戦士として生き続けなければならない。今回のことは、一つの教訓として心に留めておくんだ」

「少し黙ってくれませんか」

それから、彼の頭の中に言葉が響くことはなかった。

雨音と、窓を流れる雨粒がもたらす陰影と、静寂が部屋の中に霧のように漂った。

何かに絶望する、とはどういうことだろうか。
望みが無くなる、とはどういうことだろうか。

男には分からなかった。理解することすら出来なかった。

それはつまり、自分が何にも希望を見いだしていない、ということだ。男はそう思った。それは分かる。だから絶望することがないのだ。

絶望。

こんな言葉、自分は絶対に使わない。

男は短く舌打ちをした。

第三夜 月光

朝が色濃く世界を包み、昼はどこか遠くでこの明るい世界を傍観していた。ソフィはしかし、ただ一人その明るい世界の中で暗闇を携えていた。彼女の容姿や服装の色もさることながら、彼女の吐息の一つひとつが地獄からこみ上げてくる邪悪な空気と酷似していた。何もかもが振り出しに戻った。まるで彼女はそう言いたげに、朝日を忌々しそうに睨んだ。自分は選択を誤ったのか。初めから、全てを正直に話すべきだったのか。しかし、それを彼が信じるとは思えなかった。彼が戦士であるならばなおさらだ。明日出直そう。そう思ったソフィは、ダイナーを横目に人家が連なる通りの方へと歩いていった。

ダイナーを通り過ぎてしばらくすると、『壁』の方から黒いスーツを着た男がこちらに向かって歩いてきた。この町でスーツを着ている人は珍しい。しかもその男は黒い帽子もかぶっていたし、右手には鈍色のケースを持っていた。ダイナーで戦士の男と話していた奴だ。ソフィはちらりと、その黒いスーツの男を見た。

スーツの男は、最初単に歩いているだけかと思ったが、徐々にこちらに向かって近づいてきていた。そしてソフィの目の前で立ち止まり、帽子をつまみ上げて「こんにちは」と言った。ソフィは立ち止まらざるを得なかった。本当ならば無視して通り過ぎるべきだったのかもしれない。しかし彼には、それを許さない高圧的な見えないう壁が軀から発せられているようだった。だからソフィの足は、自然と動かなくなってしまったのだ。

「なるほど」と男は言った。「あなたが、彼の言っていたソフィさんですね」

「誰ですか」

ソフィは少し苛立ちを演出しながら、投げつけるように言葉を発した。

「名乗るほどの者ではございません。もし必要であるならば、監視人、とお呼びください」

「……監視人」

「お食事は済まされましたか？ もしよろしければ」監視人と名乗った男は、ちらりと通りの反対側に目を向けた。「あちらのカフェでお茶でもいかがです？」

断るはずの申し出だったが、気づくとソフィは「ええ」と返事をしていた。まるでこの男には人の返事を操るような未知の術を持っているのでは、と疑いたくなるほどだった。

ソフィと監視人は、通りの向かい側にあるカフェに入った。何種類ものコーヒーがメニューにずらりと並べられており、食事のメニューは少ない。美味しいコーヒーで、極上の一時を。そういう文句が店先の看板に写真と共に描かれていたが、陽の光や雨風に曝されているためか一部は色あせ、剥がれ落ちていた。

分厚い木製の扉を開けると、そこはしんと静まりかえっていた。店内に流れるスローテンポのジャズが、一層の静寂を演出していた。ダイナーの静けさとはまた違う、異質な静謐だった。そしてこの店には、一日のどの時間帯にも同じ静謐が漂っているであろうことを思わせた。喧噪とはかけ離れた世界だ。飴色の光沢を放つ頑丈そうなカウンタの中に店主が一人。従業員はおらず、どうやら店主一人で営業しているようだった。カウンタの端の席には先客が一人おり、彼は文庫本を睨んでいた。それ以外にテーブル席が数席点在している。スーツの男は入口から一番離れたテーブル席に座り、そして向かい側に手をさしのべ「どうぞ」と言った。

店主が水の入ったグラスを二つ置き「ご注文は？」と聞く。男は「何にします？」とソフィに聞いたので、ソフィは「食事はいいません」と言った。監視人は帽子を頭から外すようにしながら「じゃあ、エスプレッソコーヒーを」といってソフィの顔を見る。ソフィ

は何でも言いというような表情をした。それを見た監視人は「二つ」と言った。店主は頷いて、優雅にカウンタの中に戻っていった。

脱いだ帽子をテーブルに、ケースを自分の足下に置いた監視人は両手をこすり合わせた。

「さてと。あなたについては、彼から聞いています。ソフィと名乗り、彼に接触を図り、そして彼の仕事を邪魔した。あなたにその意思はなくても、結果として彼の仕事を邪魔してしまった、と言った方が正確でしょうか」

ソフィは返事をせずに、監視人の置いた帽子をじつと見ていた。布とは思えない光沢は金属を彷彿とさせる。帽子の形をしているが、ヘルメットと言った方が質感と合致していた。あるいは我々の知らない特別な材質であつたえられた、未知なるものなのかも知れない。「とりあえず今は、あなたの仰った通り、あなたのことをソフィさんと呼ばせていただきます。ソフィさん。彼はあなたのことについて、とても困惑している。戦士と接触するとは、こちらとしてもあなたのことを疑わざるを得ない。多少なりとも失礼な物言いとなってしまうことを、お許してください」

店主がエスプレッソを持ってきた。半分ほどのサイズのカップがちょこんとテーブルに置かれ、店主はテーブルの脇に伝票を置いてカウンタに戻っていく。無駄な動きを、無駄な発言もない静かな男だった。静かな店に、静かな男。

監視人はカップを口に付け、両目を閉じて口に流れ込んだエスプレッソを味わった。

「うん。悪くない。とても深い味わいだ」

言葉の割に、彼の評価は薄っぺらい印象をソフィに与えた。ソフィは本当はこんなもの飲みたくもなかった。小さなカップで出されたコーヒー、というそれ以上の感想など微塵もなく、忌々しいものを見るように睨み付ける。冷たいミルクティーを飲みたかった。ソフィはエスプレッソの代わりに、水を飲んだ。監視人は彼女の動きをつぶさに観察していたが、カップに手を着けないことについては

何も言わなかった。

「ソフィさん。私は、あなについていくつかの可能性に基づいた推測を持っています。お聞きいただけますか？」

返事をする間もなく、監視人は話を続けた。

「一つ。あなたは本当にラオベル氏のお知り合いで、友人の死について真相を知るべく彼に近づいた。

二つ。あなたは『壁』の謎を追う記者かジャーナリストか何かで、ラオベル氏の死亡をきっかけに戦士の存在を知り、彼に近づいた」

どちらとも違っていることを、ソフィは言わなかった。なぜならば、監視人もそれを承知の上で、単なる前口上の二つの考えを述べただけのように思えたからだ。

「三つ。あなたは『壁』から出てきた、生きた『破片』である」

監視人はソフィを見てにやりと笑った。その目に見つめられると、何もかもが凍り付いてしまうほど、冷ややかなものだった。口角の持ち上がり方もまた、同じように冷たく、そして気味が悪い！

「なるほど。やはりそうでしたか」

「よく分かりましたね」

もはや隠すことは出来ないと察したソフィは、深呼吸をして監視人の話を促した。

「あくまで可能性の話です。全うな人間であるならば『壁』に興味を抱くことなどありえませんか。太古の昔より『壁』はそこにあり、そこにあり続けたために『壁』は『壁』としての姿を失った。

人々にとって『壁』は可視化された立体的な境界線程度の認識しかありませんから。そこに意味を見いだす人間は、そう多くはない」

「しかしラオベルさんは、意味を見いだしていました」

「ええ。彼は、そういう意味では真つ当な人間ではなかったのかも知れません」

「酷い言い方」

「では、精神を病んでいた、と言った方がいいですか？ 仕方ありませんよ。どれだけ言葉を尽くしても、あるものを表現する場合、

それは往々にして残酷で酷い言い方になってしまふものです。それを取り繕おうとすればするほど、墓穴を掘ってしまうんです」

ソフィは、仕方なく、といった具合にエスプレッソを一口飲んだ。この世の苦みを濃縮したような、果てしない苦みが口の中に広がり、刺々しい味がいつまでも残った。これのどこがおいしいのか、理解に苦しむ味だった。どれだけ砂糖を入れても、どれだけミルクを入れても、刺々しい味は取れそうになかった。だからソフィは、何かを入れることもしなかったし、そしてもう絶対にこのカップに手は着けないと誓った。

「可能性の話、と言いましたが、私が『壁』から出てきた生者であるとする可能性って、一体どんな可能性なんですか？」

監視人は深く二度頷いた。

「なるほど。いい質問です。可能性と言いましたが、それは多分に直感を含んだ不安定な可能性であることを初めに断っておきます。

それ以外の現実的な情報として、まずあなたは、あらゆる光りを拒んでいる。それはあなたが黒ずくめの格好をしているという外的なものではなく、もっと本質的な部分で光りを拒んでいる。それが私には分かるのです。なぜ分かるかと聞かれれば、それは私が監視人であるから、としか答えようがありません。そして戦士と接触した。光りを拒む者が戦士と接触した。このようなケースの場合、我々は『破片』であると疑うように教えられているんです」

「誰に？」

監視人は首を左右に振った。言えない、ということらしい。

「『壁』から生きた『破片』が現れることは極めて稀な現象であります。無い訳じゃない。過去にそのような報告をいくつか目にしてきました。まさか私自身がその当人を目の前にするとは思っても見ませんでした。しかし我々はその発生プロセスを突き止めることが出来ていない。なぜ生きた『破片』が生まれるのか、全く分からないんです。ともかく、そういった理由については省くとしましよう。それを考えるのは現場にいる私のような者ではなく、もっと

別の者が行つ。今しなければならぬのは、もつと現実的な話だ。つまり、あなたが戦士と接触した目的」

先客が代金を支払い店を出て行つた。店には監視人とソフィの二人だけとなった。店主はカウンタの中でスツールに座り、店内に流れる音楽に耳を傾けていた。背景の一つとして継ぎ目無くとけ込んでいた。

「これが平時ならば、まあこちらとしても穏便に済ませる所ですが、今は違う。あなたも『破片』であるならば分かんと思ひますが、もうすぐ、『月の無い夜』が訪れます。我々が最も警戒する夜です。いくら警戒してもし過ぎるとうことのない、極めてデリケートな夜。それが、『月の無い夜』です。それまで我々は出来ることならばあらゆる面倒なことを排除しておきたい」

「『破片』を逃したり、生きた『破片』が町を徘徊するのは、面倒なことなんです」

「無論です。今すぐにでも、あなたを砕く必要がある。しかし、私は監視人としてあなたの目的を知っておきたい。なぜあなたが、戦士と接触を試みたのか。そして、なぜ『破片』を逃がするような真似をしたのか」

ソフィは黒い液体が満たされたカップを脇にどけて、水の入ったグラスを掴んだ。そして中の氷を揺らすように、グラスの縁をつまんで左右に小さく振つた。

「『壁』には、生きた『破片』がまだ大勢います。それを助けて欲しい」

「無理です」

死刑宣告のように監視人の言葉は無慈悲にソフィに向かって投げつけられた。

「なぜですか？」

「それは規則に違反しているからです。『壁』から出てくるものは、それがどのようなものであれ、姿であれ、砕くのが我々の、戦士の使命であり宿命です。また、『壁』に飲み込まれた生者は、基本的

には死にます」

「その認識を改めて欲しい、と言っているんです」

「あなたのような存在を否定するわけではない。ただ、我々は基本的にはあなたのような存在を受け入れることは出来ません。先ほど、あなたのように生きた『破片』の報告が過去にあった、と言いましたが、彼らあるいは彼女らが最終的にはどうなったか、聞きたいのですか？」

「……砕かれたんですね」

「その通りです。つまり、それが我々の答えです」

ソフィはグラスの水を飲み干すと、立ち上がった。

「あなたとはこれ以上話しても無意味なようです」

「私とだけでなく、誰と話しても無意味なものです。戦士であつても」

ソフィは可能な限り強い眼差しで監視人を睨み付けると、入口の扉に向かつてつかつかと愛想なく歩いていった。

「どこかで人知れず生きるのならば、私は今日あったことを見なかったこととします。しかし、今後、わずかでも戦士の仕事を邪魔するようないことがあるのならば、その時は」

扉の取っ手を掴み、ソフィは臍全体で押すようにして重たいその扉を開けた。

「その時は、覚悟していてください」

朝日の中に消えていくソフィ。分厚い扉が彼女の姿を遮った。

監視人の言ったとおり、しばらくは天候が安定しそうだった。それは部屋の窓から雲を見て分かった。男は窓を閉めて分厚いカーテンを引くと、蛍光灯の明かりを消して、部屋の真ん中で眠る大きな黒いケースから、三日月的な『剣』を取り出した。意図的に作られた暗闇は、しかし天然の暗闇よりは光りを有しているようで『剣』

の細部を浮かび上がらせていた。『剣』と呼ぶには、その物体には刃が無く、柄や鍔のようなものもなかった。幅広の黒い物体は微妙に湾曲し、内側の弧の端の方が欠けておりそこに取っ手のようなものがあつた。男はその取っ手を握ってケースから『剣』を引きずりだすと、床に静かに置いた。大きさのわりにその物体には重量感が欠如しており、男は極めて軽いものを扱うように、易々とそれを持ち上げ、床に置いた。暗闇の中で使う時と醸し出す雰囲気も、実際の状態もまるつきり違うようだった。

男はクローゼットを開け、手探りで上の棚に置かれた箱を取り出した。そして『剣』のすぐ脇にしゃがむと、丁寧な手つきで箱を開けた。暗闇で細部は分からないが、男はそこに入っていた布を取り出した。適切な大きさに布を折りたたみ、男は『剣』を磨いた。ソフィがそうしたように、彼もまた動物をあやすように、片側からもう片側に向かつて一方向に布を移動させていた。毛並みに沿ってブラシを移動させているようだった。

自ら作つた暗闇の中、男はじつと息を潜めながら『剣』を布で撫で続けた。そう、撫でているのだ。磨いているのではなく、撫でている。そう表現するのがぴたりだった。

「『月の無い夜』が近づいている。お前は、お前が体験したことの無い量の『破片』を砕くことになるだろう。戦士ならば、誰しもが通る険しい道の一つだ」

暗闇の中で、男の頭の中に声が響く。しんと静まりかえつた部屋は、雪が降り積もつた夜を連想させた。あらゆる音が吸収され、どこかへ消えていく夜。布のこすれる音さえ、今にも消えてしまいそうだった。黒一色で塗られたキャンパスから何一つ形を見いだせないのと同じく、この部屋の暗闇もまた、そこに人がいることも、何かをしていることも分からなくさせた。

「雑念があるならば、それを捨てなければならない。これはある種の儀式のようなものだ。だがお前は何かを信じたり、何かに心を預ける必要はない。お前はただ、『剣』を振るい『破片』を砕く。そ

れが何であれ、どのような姿であれ、『剣』を振るい続けなければならない。永遠に思える暗闇の中で、お前はそうやって戦士としての宿命を全うしなければならない」

戦士の宿命とは何だろうか。自分はいつから戦士で、そしていつになったら戦士の宿命を全うし、普通の人間になるのだろうか。生まれたとき、当然ながら自分が戦士であることなど知るよしもなかった。それから二十年ばかり、戦士という言葉の意味すら正確に知ることなく、男は生きてきた。だがある日突然、それは天からの啓示のように、確かに自分の身に降りかかってきた。そして、選択の余地もなく男は宿命という名の何かを背負わされた。大きさも形も分からない何かを。降ろすことも、壊すことも出来ず、男は言われるがまま、指示されるがままに仕事を行ってきた。古来より人を囲む『壁』。そこから出てくる『破片』を砕く仕事をしてきた。監視人はまるで詩の一節を暗唱するように、実に身勝手に戦士にまつわるあらゆる事柄や決まりを男に説明した。

風もなく、虫もいない、動物も息を潜める、そんな夜。そんな夜にもし月が雲に隠れていたなら、『壁』は微細な生物の集合体のように蠢き『破片』を生み出す。『破片』は人を『壁』に引きずり込む血と肉が『壁』の一部となり『破片』は残った骨を喰らい、再び『壁』の一部に戻る。そうやって『壁』は大きくなり、人はいなくなっていく。そのようにして滅びた町がいくつもある。戦士は人の滅びを食い止めなければならない。『破片』を砕き、最終的に『壁』そのものを砕くのが戦士の役割であり、宿命である。そのために戦士は与えられた『剣』を振るう。『剣』に内包された暗黒的光りが唯一『破片』を砕く力を持っている。暗黒的光りは、いかなる光りも拒む。自然の生み出す光り、人の生み出す光りを問わず、全ての光りを拒む。なぜならば、『剣』自身の光りが暗黒に由来しているからだ。暗黒を反射して、『剣』は光る。『剣』によって砕かれた『破片』は原始の光りとなって無に還る。『剣』は、いかなる理由があっても光りに曝してはならない。『剣』に満たされた暗黒が晴

れるようなことがあれば、『剣』は『剣』としての様相を崩し、それは戦士の死を意味する。人は数々の理由によって死に、それは戦士にも当てはまる。だが戦士が『剣』を光りによって失い死ぬ事だけは、決して許されることではない。それだけは決してあつてはならない。決してだ。『剣』は、『月の無い夜』が訪れる前に、研ぎ澄ます必要がある。内包する光りが曇らないように、暗黒をより深い暗黒へと誘わなければならない。そのために戦士は、夜、月が煌々と光る夜、窓のカーテンを引き、部屋の電気を消して、静かに『剣』を取り出し、闇が染み込んだ布で暗黒を磨き抜く必要がある。どれだけ磨いても磨きすぎることはない。何度も何度も、繰り返し繰り返し磨く。可能な限り光りが失われた部屋で、だ。カーテンも分厚い方がいい。人工的に生み出された暗闇は、自然が生み出す暗闇には到底敵わない。しかし、それでも出来るだけ暗くすることを心がける必要がある。君自身も同じだ。『剣』が損なわれれば戦士が死ぬように、戦士が損なわれれば『剣』もまた同じ道を辿る。君は出来る限り闇を受け入れる必要がある。それは孤独であつたり、閉鎖的環境であつたり、陰鬱とした心であつたりする。それらを拒まず、全て受け入れ、むしろ自ら進んでその中に足を踏み入れていかなければならない。昼間はなるべく出歩かず、可能な限り人との接触を避けた方がいい。陽の光を見ることがすら、出来るなら避けて欲しいくらいだ。つまり私が言いたいことは、戦士というのは闇の中に頭のでっぺんまで沈み生きることが求められている、ということだ。

後にも先にも、監視人が高圧的な口調で話しかけてきたのはこの時だけだった。初めて会ったとき以来、監視人は穏やかな口調になり、物腰が柔らかくなり、まるで営業マンのようにいつだってにこやかな表情を崩さなかった。しかし、彼の放つ雰囲気は隠しようのない暗闇に満ちていた。深い谷底のような瞳がいつだって相對したものを突き刺した。

戦士というものが、逃れることの出来ない呪縛であることをその

時男は悟った。むしろ、逃れたいという感情を監視人によつてはぎ取られたといつてもいい。混乱も困惑も動揺も驚嘆も、全てがはぎ取られてしまった。代わりに与えられたのは、黒く染まつた心だ。監視人は、戦士となるべき男の胸に腕を差し入れ、そこにあつた健全な人の心を抜き取り、代わりに真つ黒に染まつた塊を置いていったのだ。塊には初めからあらゆる感情が無く、新たなに感情が芽生える隙間もない。あるのは戦士としての数々の決まり事と、闇に満ちた志だけだ。そして監視人は必ず最後にこういう。

「次に会う時は、あなたの笑顔が見たいものです」

笑顔がどんなものか、男には思い出せなかった。男が誰かに対して行つた表情の変化は、もはや反射的な筋肉の痙攣のようなものに過ぎない。

真つ黒に染まつた心に似せた塊に、感情など一つとして無い。

あるのは、戦士としての数々の決まり事と、闇に満ちた志だけだ。男が戦士として優秀と言われる所以はここにある。つまり彼は、どの戦士よりも闇に適合したのだ。心を取り替える必要など無いほどに、彼の心は初めから黒かつた。監視人はあくまで儀礼的に、彼の心を取り替えたに過ぎないのだ。彼はそもそも孤独を進んで受け入れた。消去法によつて残つた自分の生き方が孤独しかなかった、と言つた方がいいかも知れない。家族の絆を信じなかつたし、仲間の友情を信じなかつた。愛情も、優しさも、彼の軀を通り抜けていく風と同じで実感のない空虚なものだつた。そう言つたものが本来収まる場所に、男は何一つものを入れようとしなかつた。空っぽのまま生きていた。次第にそこには宿命的な闇が堆積していく。埃のように、しかし埃のようにぬぐい去る事の出来ない闇が降り積もっていく。人は彼を根暗といい、あるいは大人になる課程に生じる誰しもが経験する年齢的な心の不安定さだとも言つた。根暗であることは正しかったが、後者は全くの見当違いな考えであると男は思つた。

時として彼の本質的な闇に好んで近づこうとする人もいた。そう

いう人からは、彼はミステリアスな人間として映るようだった。けれど、彼の闇はミステリアスという言葉が許容する意味を遙かに超えるものだった。想像以上にその穴は深く、石を投げ入れても音がしない。身を投げようものなら、二度と再び光りを浴びることが出来ないほどに深い。それを知り、近づいてきた者は遅かれ早かれ彼のもとを去っていった。ある者は一日で、ある者は数時間で、彼と言葉を交わすことを拒んだ。それは人間が本来持つ防衛本能のようなものだ。闇に潜む魔物を恐れ、近づくことを拒絶したのだ。

「もうすぐ夜が明ける。朝日はどんな闇も追い払ってしまうぞ」

男は我に返り、時間が急速に自分を通り抜けていたことに気づいた。闇の染み込んだ布を丁寧に折りたたみ、小箱の中にしまうと、次に『剣』をケースに収めた。そして男は、もぞもぞと這うようにしてベッドの中にもぐり込んだ。朝日がカーテンを通過して部屋に光りを届けるその前に、男は深い眠りの穴の中に落ちていった。

第四夜 新月

監視人が言った『月の無い夜』とは、つまり新月、正確にいうならば朔日のことだ。月が一体どのような力を持つてして『壁』とその『破片』に干渉しているかを男は知らなかったが、とにかく月が出ている時『壁』はただそこにある巨大な土塊に過ぎず、月が隠れている時『壁』はその内側から『破片』を生み出し、人を求めて彷徨い出てくる。ただ、一般的な現象として捉えられている新月と監視人のいう『月の無い夜』は微妙に意味が異なっている。新月は必ず定期的に訪れるが、『月の無い夜』はいつ訪れるかわからない。しかしそれは必ず一般的な現象としての新月の日と被る。戦士の中には、時として『月の無い夜』を体験することなく死んでいく者もいる、と監視人はかつて男に説明した。それほどに『月の無い夜』は広い間隔で、唐突に訪れるのだ。

月が無くなる、その瞬間、『壁』はかつて無いほど活性化する。それは日常、戦士が仕事を行う時の蠢きとは全く比較にならないほど激しい。監視人は、その激しさのありようを、ありったけの言葉で説明したのだが、男はその言葉を何一つ覚えていなかった。そのような情報は何の意味もないのではないか、と男は思ったからだ。男は戦士となつて『破片』と幾度となく対峙し、その状況が過去に監視人に言われた状況とまるつきり違うということを体験していた。監視人は戦士ではなく、戦士と『壁』を傍観している立場に過ぎない。だから、彼の言う言葉の多くを男は聞かなかった。そう言う意味で、男は戦士として極めて現実的な考えを持っているといえた。

『剣』の暗黒的輝きを磨き上げた日から二日後の朝。ベッドから起き上がった男は窓を開けて空を見た。雲の動きや、天空を彷徨う空気の放流や、太陽のもたらす朝日を見た。そして確信した。今日の夜こそが『月の無い夜』であることを。何も知らない人がこの空を見ても、そこに特別な何かを見ることは出来ない。なぜなら

ば、これは戦士にのみ与えられた一種の特殊な能力だからだ。どうしてこのようになったのか、それは男にも分からなかった。なぜ自分は、空を見るとその日に月が隠れるかどうかを知ることが出来るのか、全く分からなかった。だがその力は、監視人が突然現れ、黒いケースに収まった『剣』を自分に託したその日から、それまで全く空に興味など欠片も無かった男がふいに空を見上げた時、直感的に分かるようになったのだ。監視人はこれを、戦士の眼と呼んだが、そんなことはどうでもいい。とにかく今日の夜、月はこの世から一時的ではあるにせよ、完全に姿を消す。月という存在そのものが、消えてしまう。

まだ真新しい朝日は、起き抜けの男の目には痛みとしてしか感じなかった。だから男は空の状態を確認するとすぐに窓を閉めてカーテンを引いた。薄暗くなった部屋で、男はベッドに座った。両足の間に組んだ手を置き、じつと床の一点を見つめた。部屋に聞こえてくる音は、外からもたらされる数々の音の残響と、時計の無機質な一秒を刻む音だけだ。男の息づかいさえ、聞こえない。この部屋は、外界から隔絶された牢獄のようだった。身じろぎ一つすることなく、男はその姿勢のまま硬直していた。死刑執行を待つ囚人の陰鬱さが男の全身を覆い尽くした。男の目は静かに閉じられ、自分の中にあるあらゆる感情（そんなものはそもそも無いのだけれど）を体外に排出していた。どんな些細なものすらも、男の中には存在出来ない男の中にある心の器は、真正銘の暗闇で満たされているのだ。

インターホンが鳴ったのは、男が硬直してから二時間が経過した後のことだった。男はわずかも動かずに二時間、ベッドの上でただひたすらに停止していたのだ。

男はインターホンを無視した。しばらくすると、ドアを叩く音が聞こえた。初めは控えめだったドアに対する殴打は、時間の経過に応じて激しくなった。

「ねえ、いるんでしょ？ 開けて。お願いよ、私の話を聞いて」
目を閉じ、死体のように硬直していた男だったが、ドアの向こう

から聞こえる声が間違いなくソフィの声であることは分かっていた。むしろ男には、インターホンが鳴った時点でソフィがやってきたことを感じていたのだ。

「部屋に入れてくれないのなら、それでもいいわ。私の話を聞いて」
しんと静まりかえった部屋に、ソフィの声はドア越しであるにも関わらずよく聞こえた。

「あなたに助けて欲しいの。監視人は何も分かっていない。いえ、分かっているのかも知れないけど、それを解決しようとしてくれないの。『壁』は確かに『破片』を生み出し、人間をそこへ引きずり込んでしまう。けど引きずり込まれた人間が全て死んでしまっているわけじゃないのよ。どうしてそうなったかは分からないけど、引きずり込まれた人間のうちの何人かは、今も『壁』の中で生きているわ。血も、肉も、骨もそのままに。あなたに、助けて欲しいのよ。だから、だから」

男がドアを開けたため、ソフィは黙った。「ありがとう」と言ったソフィだったが、男はドアを開けるとすぐに部屋の中に戻り、またベッドに腰掛けて静かに目を閉じてしまった。まるでドアを開けるためのだけの機械が何かのように、自分の役目は終わったと言いたげに彼は再び死体同然の静寂さを取り戻した。

ソフィは遠慮がちに部屋の中に入り、廊下と部屋の狭間の部分で座り込んだ。彼女の黒いワンピースが床に広がり、折り重なった裾が床に花びらのように広がった。俯いた彼女の顔を淀みない黒髪が覆う。たれ込めた髪の毛の間から、ソフィは盗み見るように男を見た。

「そう……今晚なのね。月が消えるのは」
ソフィの言葉は、男に対してというよりは自分に対して言っているようだった。

「これはあなたにしか頼めないことなの。他の誰でもない、あなたにしか」

ソフィの声はあまりに虚しく紡ぎ出された。それは不思議な響き

方をして、次の瞬間には意味を失い床の辺りに落ちていった。それでも彼女は、その落ちた言葉を男が拾い集めてくれることを信じて話を続けた。

「私は、確かにラオベルさんの知り合いなんかじゃない。知らないわけじゃないけど、知り合いと呼べるほどの仲じゃない。私は、今よりもっと昔、四十年か五十年ぐらい前に『壁』に飲み込まれたの。私の本当の名前はソフィ・リンジェル。リンジェルという姓がこの町にまだ残っているか分からないけど、私はその長女。父の名はダニア。ダニア・リンジェル。母はモンライル。モンローと呼ばれていたわ。それと妹が一人。妹の名前は、ヒトミ」

男の指がぴくりと動いた。

「ヒトミ・リンジェル。この辺りじゃあ、少し変わった名前かも知れないわ。けど、父は生まれたばかりの赤ん坊を抱き上げ、その子の眼がまるで宝石のように輝いているのを見て、そう名付けた。彼女が生まれたその年に、私は『壁』に飲み込まれた。私はその時十歳で、『壁』の中で徐々に歳を取っていった」

「君は」男の声は、氷が溶けるようにゆっくりと部屋の中に伝播していった。

「『破片』なのか？」

「ええ。私は、『破片』よ。生きた『破片』。『壁』の中はことは違う時間の流れがあるの。それはとてもゆっくりとしたもので、頭がどうかしてしまうぐらい遅いの。でも、そのおかげで私はずっと町を見続けることが出来た。町の変化をずっと見てきたの。四十年とか、五十年とか、そういう時間、ずっと私は『壁』の中に捕らわれながら、外の世界を見ていた。ちょうど、牢屋の中で鉄格子を両手で握りしめながら手の届かない青空を眺めるのと同じようにね」

「どうして『破片』が生きているんだ」

「それは私には分からない。なぜ生きるものと死ぬものがあるのか。もしかすると、これは一種のバグなのかもしれない。予期せぬエラーのようなものかもしれない。いずれにせよ、確かなことは一

つ。『壁』にはまだ、生きた『破片』がいる。そして、私があの日あなたの邪魔をしてしまったあの日、『壁』から出てきた『破片』は生きた『破片』だった。だから、私は咄嗟にあなたを止めたの」

男は床に視線を落としたままだった。

「君は、あの『破片』を、ダイナーの夫婦の子供だと言った」
「ええ」

「けれど僕が知っている話では、このダイナーの夫婦は、二十年以上前に子供を事故で亡くしている」

ソフィは顔を上げ、右側の髪の毛を耳にかけた。

「『壁』に飲み込まれようと、事故で死んでしまおうと、我が子にそこにいることに変わりはないわ。それに、この町において『壁』にまつわる話は、それが何であれ、あなたが思っている以上にタブーなものなの。町の人達にとって、『壁』は単なる壁でしかない。それ以上でもそれ以下でもない。何か害をなすものでもないし、有益なものでもない」

男はベッドから立ち上がると、ソフィの前を横切り台所に行って水を二杯一息に飲んだ。そして流し台に両手をついたまま、ソフィに背中を向けた状態で口を開いた。

「僕に頼みたいことって、何です」

ソフィは床の一点を見てじっと考え込んだ。数秒、あるいは数秒、彼女の動きは静止する。そして意を決したように男の方へ向き直った。

「あなたに助けて欲しいの。生きた『破片』達を。正確に言えば、殺さないで欲しいのよ」

男は深いため息をついた。そんな事は無理だ、という意味のため息だった。

「無理なのは分かっているわ」とソフィは男の気持ちを察して、そのように前置きをした上で話を続けた。「あなたの前任者は、『月の無い夜』に現れた全ての『破片』を砕いてしまった。何もかも。その時、私はたまたま『壁』から現れることはなかった。だから

ら、『壁』の中からじつとその様子を見ていたの。前任者は容赦なくあの『ソフィは部屋の中央で沈黙を貫き通す黒いケースを指さした。』あの禍々しい『剣』で、全てを砕いていった。目の前にある全ての『破片』を。あれは蹂躪と呼ぶに相応しいおぞましい光景だった。もちろんその中にはいわゆるあなた達が敵対している本来の『破片』もいたけど、生きた『破片』もいたの。けれど、そんなことはお構いなしに、前任者は砕いていった。何もかもを、木っ端微塵に」

ソフィの声は震えていた。男は振り向いて、腰を流し台の縁に押し当てるようにして直線上にある白いモルタルの壁を見つめた。それは普通の壁だ。あちらとこちらを隔てる、本来の意味での壁だ。

「僕は戦士になって、初めて『月の無い夜』を体験します。それがどんなものなのか、僕には想像も出来ないしするつもりもないけれど、監視人はとにかく凄まじいものだと言う。夥しい数の『破片』が一斉に何か巨大な物体に押し出されるようにして現れる、と言う。君は僕に、その夥しい数の『破片』の中から、本来の『破片』と生きた『破片』を選びすぎり、本来の『破片』だけを砕けと、そう言うんですか？」男はソフィの返事を待たなかった。「仮にそれが現実的に可能であったとしても、僕には無理なことです。僕には生きているか否かを判別することは出来ない。あの時、君に止められなければ僕は間違はなくあの『破片』を砕いていた。戦士として砕いていた。そんな僕に一体何が出来ると言うんですか？」

ソフィは言葉をまくし立てる男からわずかも視線を逸らさずに、じつと彼を見据えた。

「出来るわ」

「僕には出来ない。君は、僕がこの町の戦士だからそう言っているだけだ。僕じゃなくても、君はその時の戦士に今と同じように願いを言ったはずだ。それがたまたま僕だっただけのことだ」

「違うわ。あなたじゃなかったら、こんな事は頼まない。あなたじゃない別の人がこの町の戦士だったならば、私は全てを諦めていた」

「そもそも、君が生きた『破片』である証拠がどこにある？ 君が本当に生きた『破片』であるならば、君を逃した戦士がいるということだ」

「『壁』は戦士の存在に関わらず、時が来れば動きだし、『破片』を生み出す。私は戦士が不在の時期に『壁』から出てきた。そして町の外れに隠れ住み、私の願いを叶えてくれる戦士を待っていたのよ。それにあなたも見たはずよ。あの時、月が夜空に現れたら、私の姿が消えたのを」

男の目は壁から天井に移った。天井を見上げ、そして首を振りながら今度は

自分の足下を見た。確かに、ソフィが仕事を邪魔した日、去り際に背後を見た時そこにソフィの姿は無かった。視線だけが自分の軀を貫いていた。それを男は思い出していた。

「信じて。そして、あなたなら、生きた『破片』を殺さずに救うことが出来る。砕かずに、生かしておくことが出来る」

「言ったはずだ。僕には、『破片』を見極めることなんて出来ないんだ」

「出来るわ。あなたには、心があるもの」

「心？」

「あなたは戦士であるにも関わらず、心がある」

「心なんて、あるはずがないよ。僕は監視人から戦士になるための洗礼を受けているんだ」

「洗礼がどんなものかなんて知らないけれど、あなたにはまだ心がある。生まれた時から持っていた心が、手つかずのままあなたの中にあるのよ。きっと、監視人はそれに気づかなかったんだわ。それはあまりに闇に近い影に満たされていたから。けどそれは確かに人の心よ。その闇なり影なりが晴れば、あなたは心を持った唯一の戦士になる。心があれば、『破片』を見極め、識別し、砕くべきものとそうでないものが分かるようになる。あらゆるプロセスを飛び越えて、それは直感的にあなたの意識に浮かび上がる。戦士が、空

を見てその日の夜のことが分かるように、直感的に」

「君は戦士について何も知らない。戦士に必要なのは、闇なんだ。闇がなければ戦士として生きていられない。もし闇が晴れてしまえば、戦士は戦士じゃなくなってしまうんだ」

「大丈夫よ。他の戦士がそうでも、あなたは違う。光と闇が混在したただ一人の戦士になる可能性を秘めているわ」

「惑わされてはいけない。この女の口車に乗ることは、この町を危険に曝すことになる。それをお前は分かっているはずだ。お前の言う通り、戦士に最も必要なものは闇だ。それもただの闇じゃない。真正正銘の、本当の暗闇だ。自分の姿さえ見えない漆黒の暗闇こそが、戦士を戦士たらしめる唯一にして絶対の要素だ。それを失えば、お前は戦士としての資格を失うばかりか、町そのものを壊滅的な状態へ導いてしまう。お前はその瞬間、戦士から悪魔に変わってしまうんだ」

頭の中に不可思議な響き方で声が聞こえ始める。集中しようとするほど、頭の中の声は躰の隅々にまで伝播し、躰そのものを振るわせ始める。

「いますぐこの女を砕け。今この場で。雲が一瞬だけ太陽を隠す。カーテンは引かれているし、この部屋は一瞬だが『剣』を抜くに必要な最低限の暗闇を有する。お前ならば、出来る。この女を砕き、この町に蔓延る『破片』を全て砕く。それが戦士としての、お前に科せられた使命だ」

男はこめかみを押さえた。そうすることで、声がどこかへ行ってくれることを願ったが、声は呪いのように脳を縛り付け、そればかりか筋肉の動きすら制御しようとし始める。男の脚が、意識せずに一歩、また一歩と前に進み始める。ぎこちない動きで、男は部屋の中央にあるケースのもとへ行き、そしてしゃがみ込んだ。カーテンを通り抜けて部屋にもたらされる微細な陽光は、しかし確かに声の言つとおりもうすぐ陰ろうとしていた。

「私を……砕くの？」

ソフィの声が後ろから聞こえてくる。だがそれ以上に、声が男の全てを覆い尽くそうとしていた。理性や本能にすら浸食し、あらゆる判断を奪い去ろうとしていた。男の手が、ケースに伸びた。その指先は小刻みに震えている。男に残ったわずかな自我が必死に抗っていた。ケースは今まさに開こうとしている。いつもならばその隙間に右手を差し込み『剣』を取り出し、それを振るうのだが、男にはそれが出来なかった。震える右手を左手で押さえ込む。

「さあ。早く、早く、この女を砕け。砕くんのだ」

歯を食いしばり、何とか遠ざかる自我を取り戻そうともがく男だったが、もはや声はそういった意識にすら潜り込み、あらゆる思考を引き剥がしていこうとしていた。

「早く！ 砕け！」

雲の動きが影となって部屋の中に流動的な陰影を作る。然るべき時が近づく。声が言った、一瞬の時が。この部屋に必要最低限の暗闇が訪れる。

「早くやれ！」

男はぎゅっと目をつぶった。そして右手で握り拳を作ると、ケースを強く叩きつけ、そしてその勢いを利用したかのように勢いよく立ち上がると、窓に飛びつきカーテンを掴み、乱暴にありったけの力で引つ張った。カーテンレールからフックが飛び散り、カーテンはだらしなく部屋の床に倒れ込んだ。窓から燦々とした太陽の健康的な光りが一斉に部屋の中の暗闇を追い払った。

男は肩を激しく上下させながら「黙ってくれ」と一言、小さく呟いた。

ケースから発せられていた気配が一瞬にして消え、ケースは継ぎ目なくぴつたりと閉じられた。

「やっぱり……あなたしかいない」

「帰ってくれ」

「やってくれるのね」

「帰ってくれ」

逆光になった男の黒い背中を見つめながら、ソフィは立ち上がった。そして一度何かを言いかけたが、それを押しとどめ、彼女は部屋を出て行った。ドアが閉まる音がして、部屋は再び重苦しいほどの静寂に包まれた。

「お前は判断を誤った。そして私も判断を誤った。お前を優秀な戦士と評価したが、それは違ったようだ。お前は戦士として最も下等で、粗悪で、どうしようもない存在だ。今すぐにでも、死んだ方がいい」

「黙れ」

「後悔することになるぞ」

目を閉じても感じる太陽の強い光りが、男の中に土足で踏み行ってくる。拒みようのない明るさだ。そして背中には、拒みようのない暗闇が満たされたパンドラの箱が死の宣告をする死神のように禍々しくそこにあった。

光りを見るべきか、闇を見るべきか。

男は振り返り、なるべく足下を見ないように部屋を横切つて、そしてドアを乱暴に開け、乱暴に閉じた。

窓から差し込む圧倒的な光りが、部屋の中央にあるケースの圧倒的な闇を浮かび上がらせた。

「後悔することになるぞ」

誰もいない部屋で、悪魔のような囁きが中空に生まれ、そしてどこかへ消えていった。それは光りにとけ込んでいったのかも知れないし、闇に飲み込まれたのかも知れない。

無人の部屋は、当然ながら何の音も発することなく、ただひたすらに静かだった。

昼過ぎの町には、たくさんの光りに満ちていた。空を見上げると目の奥がちくちくと痛んだ。前髪を手で整えながら、男は町に一軒

しかない本屋に入った。本屋はとても小さく、店の中は縦に長かった。入口のすぐ脇にカウンタがあり、老婆がカウンタの向こう側で椅子に座っていた。会計のためのレジはかつては真つ白だったのだろうが、今では至る所が黄ばんでいて時の経過を感じさせた。棚にはぎっしりと本が詰め込まれていて、空いた隙間にも本が横倒しに突き刺さっていた。通路にも本が積まれている。古本屋のようだったが、古本として本が売られているわけではない。ただ、買い手がいないせいで昔の本がその時のままずっと棚に放置されているだけだ。男は店の奥から順番に棚を見て回った。そして最終的に文庫本を一冊買って、店を出た。ほとんど中身も見ずに、彼はその本を買い求めた。

買った本をポケットに押し込み、その足で男はカフェに向かった。分厚い木製の扉を押し開けて、店内に入ると、静かなジャズが鳴っていた。店主の男はテーブルを拭いて、椅子やテーブルの配置を正していた。男が入ってきたことに気がつく、手を動かしながら顔だけをこちらに向けて「いらっしやい」と言った。男は適当なテーブルに座り、適当なコーヒーを注文して、買った文庫本を開いた。文庫本を読み進めていると、気がつけばテーブルにコーヒーが置かれていてことに気がついた。店主を見ると、店の奥に引込んでしまったのか、姿が見えなかった。あるいはカウンタの向こう側でしゃがみ込み、何か作業をしているのかもしれない。どちらでもいいことだった。

この店には喧噪というものがまるで存在していなかった。時間の流れすら、現実とかけ離れているようだった。果てしなく引き延ばされた時間の中で、男はひたすらに本のページを捲った。本に飽きると、男は立ち上がり入口近くにある公衆電話に小銭を入れて十五桁の番号を押した。受話器を耳に押し当てて、コール音をじつと聞く。

「もしもし。どうかしましたか？」

電話口から聞こえてきたのは、間違いなく監視人の声だった。

「調べて欲しいことがあるんですが」

「珍しい。どんなことですか？」

「この町に、リンジエルという姓の人はいますか？」

「リンジエル。どうでしょうね。ちょっと調べてみます。すぐに分かりますから、そのままでお待ちください」

電話口から監視人の声が消えて、代わりに音楽が流れた。それが何というタイトルの音楽なのか、男には分からなかった。受話器を反対の耳に変えて、壁にもたれながら音楽をじつと聞く。反対側の耳には店内に流れる静かなジャズが聞こえ、受話器からは題名が分からない陽気な保留音が聞こえた。店主の姿は見えない。

「お待ちせしました。リンジエルという姓の人物ですが、この町にはもついませんね。ただ、あなたの身近に旧姓がリンジエルの女性がいいますよ」

「ソフィ・リンジエルという名前は記録にありますか」

「ソフィ……ソフィ……ありますね。ソフィ・リンジエル。ずいぶん昔に行方不明になっています。恐らく『壁』に飲み込まれたんでしょう。で、このソフィって誰なんです？」

「もう結構です。ありがとうございました」

男は受話器をフックに引っかけた。そしてまたテーブルに戻り、文庫本の続きを読んだ。

本の内容など、まるつきり頭の中に入ってはこなかった。ただ彼は、機械的に文字を追いかけて、ページの終わりが来たら捲るという作業を続けているだけだった。彼が何を考えていたかといえば、ソフィが話していたことについてだった。生きた『破片』と本来の『破片』。監視人から何となくではあるが話を聞いたことがあった気もするが、記憶の遙か奥底に埋没してしまい思い出すことは出来なかった。しかし、ソフィの言葉にもう嘘がない事は、分かっていた。監視人への電話は、その最終確認のようなものだ。彼女は確かに昔、この町で生きていた。ソフィ・リンジエルという名前で、ごく自然に、ごく平凡に、この町で生きていた。彼女がどんな生活を

嘗んでいたかは分からないが、それは時に幸せに満ちていて、時に辛いことがある、そういうありきたりなものであつただろう。ありきたりではない人生などない。戦士を除けば、この世にある人生の多くは、多少の起伏の差があるだけで、大体が同じ曲線を描いているはずだ。しかし彼女のそういつたありきたりな人生は『壁』という存在によつて打ち砕かれた。『壁』の中に捕らわれ、全く違った時間の流れの中で生きていた。この店に漂う観念的な時間のズレではなく、実際のな、本当にズレた時間の牢獄の中で生きていた。彼女の現実味を欠いた雰囲気は、きつと牢獄の中に長く居すぎたために染み込んだ呪いのようなものなのだろう。彼女があらゆる光りを拒んでいるように見えるのは、それが『破片』だからだ。『破片』は光りを拒む。暗闇の中でしか生きられない。生きた『破片』であるために太陽の光の下で実体を保っているが、やはり月光の下では姿が消えてしまう。あの時感じた視線は、そこに存在しているはずの彼女から発せられた確かなものだったのだ。ただ姿が見えなかっただけだ。『破片』は光りの下では生きられない。正確に言えば、存在していても姿が消えてしまう。しかしそれは、生きていない、ということとほとんど同じと言っても違わないはずだ。人間に限らず、生命は相対的に自己の存在を確認するものだ。そこには心臓が鼓動しているとか、躰が自分の思い通りに動くとか、そういうものはあまり関係していないように思えた。それらの状況は、単に人の機能の一つであり、生きているという実感とは別にある。自分の言葉が相手に届く、相手の言葉が自分に届く、お互いがお互いに触れ合うことが出来る、そういった関係が生きている実感を与えるはずだ。生きていなければ、存在する意味などない。生きることを望むならば、他者との相対的関係を築かなければならない。それが『破片』に出来るのだろうか。生きた『破片』を仮に全て砕かずに生かしたとして、彼らあるいは彼女らは、果たして生きているという実感を得ながら存在することが出来るのだろうか。さらに言えば、彼らあるいは彼女らはそれを本当に切望しているのだろうか。切望し

ているとして、町は受け入れるだろうか。住む場所はどうするのか。住民として登録されるのか。それを町が許すのか。生きた『破片』の全てが、ソフィと同じとは限らない。もっと本来の『破片』寄りの生きた『破片』がいたとしてもおかしくはない。とすれば、それはあらゆる光りの応酬を受け、たちどころに姿が見えなくなる。姿が見えるのは、光りが消えたほんの一瞬。月明かりのない夜、ただ。それで生きていると言えるのか。もっと現実的な迫害を受ける可能性もある。ソフィの願いは、あくまで彼女個人の願いに過ぎない。他の『破片』がそれを望んでいるとは限らないのだ。

彼は自分が何をすべきか悩んだことはなかった。いつだって目の前にはやらなければならないことが一つだけ転がっていた。それを拾い上げるだけの作業しか彼は知らない。いくつかある選択肢の中から、最適なものを選ぶことを、彼は知らなかった。仮に選択肢があつたとしても、選ぶべきものはいつだって決まっていた。それが一番大きく、一番近くに転がっているのだ。だから拾い上げるのも簡単だし、迷うこともなかった。だが今回は違う。選択肢は二つある。ソフィの願いか、戦士の宿命か。どちらも等しい大きさをしているし、どちらも自分から等距離にある。違いといえば、目的達成のための複雑さだ。戦士の宿命を全うするならば、それは簡単なことだった。いつもと変わらない。目の前に現れた『破片』を一つ残らず砕くだけ。その瞬間、自我はどこか知らない所へ追いやられ、戦士としての意識が表層に現れる。そして後は、その意識に従うだけだ。ソフィの願いの方がそう言うわけにはいかない。戦士としての意識に任せるわけにはいかない。自らの自我を保ち、目の前の『破片』を見定め、砕くべきものを決めなければならない。そんなことが出来るのか。いつもならば、間違いなく戦士の宿命を選ぶところだ。なぜならば、ソフィの願いには果てしない困難がつきまとう。自分に出来るかどうか分からないことに挑戦するのは、無謀というものだ。それなのに、今、男の心は揺れ動いていた。

本を途中で閉じて、コーヒーの代金を支払い店の外に出ると、外

はもう暗くなり始めていた。遠くの空から夜が近づいてくるのが分かった。時間はない。悩んでいる時間はないのだ。

『『月の無い夜』』は、もうすぐそこまで迫っている。

夜七時頃、ダイナー「ムーン・ナイト」にやってきた常連客は、カウンタの中にアルゴンとヒトミの二人がいるのを見て驚きつつも笑った。

「おいおい、どうしたっていうんだ。二人とも店にいるなんて珍しいじゃないか」

ほとんどの場合、ヒトミは零時前頃にならなければ店にやって来ない。その時間にアルゴンと交代し、彼女は朝まで働くのだ。

「目が冴えちゃって。お邪魔？」

「とんでもない」常連客はカウンタに座った。「どんだけ飯がうまくても、こいつの仏頂面を見せられちゃあ、フオークを持つ手が止まるってもんだ」

アルゴンはグラスビールを置いて「文句があるなら帰ってくれていいんだぞ」と大地を揺らすような低い声で言った。常連客は笑った。

「ほら、これだ。この声、ヒトミさんからも言っていてくれ。もっと愛想を良くしろって」

「ダメよ。この人は、生まれた時から仏頂面で、生まれた時からこの声で泣いてたんだから。ね？」

「生まれた時のことなんて、覚えてない」

「生まれた時にこの声で泣かれたら、おっかなくてたまないや」常連客がヒトミが談笑している間に、アルゴンはくるりと振り返り料理を作り始めた。アルゴンは確かに仏頂面で声も低く、愛想の欠片も無かったが、常連客がいつも頼むものをほとんど全て暗記していた。だから常連客は店に来るなり、何も言わずにテーブルに着

くだけでいつも頼んでいる料理が日々多少のアレンジを加えられて、自動的に目の前に出てくるのだ。そしてその料理が、文句の付けようがないうまさであることは言うまでもない。

常連客が灰皿を手元に引き寄せて、煙草を一本吸うと、アルゴンが置いたビールをぐつと一息で半分ほど飲んだ。

「そういえば、今日は月が出ていなかったな」

赤く燃える煙草の先端を見ながら、常連客が思い出したように呟いた。アルゴンを手伝うヒトミが、肩越しに常連客を見て「あらそう」と返事をした。

二人が料理を作っている間に店内は徐々に客で埋まり始める。常連の客は店に入ると、最初にやって来た常連客同様、カウンタにアルゴンとヒトミの二人がいることにひとしきり驚いて、そしてアルゴンの愛想の無さをやり玉に挙げて会話を展開させた。客同士がそれで盛り上がりつつある中、アルゴンが作った料理をヒトミがそれぞれのテーブルに運んでいく。普段はカウンタに次々にアルゴンが料理を置き、常連客同士が自ら互いに料理をテーブルに運んでいく、というのがこの店のこの時間帯における日常の光景だが、今日はヒトミが給仕となってテーブルに料理を運んだ。

「ヒトミさんが料理を運んでくれると、料理が一層美味しそうに感じるな」

「ありがとう」

ヒトミは小首を傾げて、少女のように愛らしく返事をした。

一通り料理を運び終わったヒトミは、アルゴンと一緒にカウンタの中で調理器具を洗って片付けた。そういった作業をしながら、ヒトミはカウンタに座る常連客達の他愛もない話に相づちを打ったり、会話を広げたりしていた。

「今日は新月だから、月が出てなかったな」

「ああ、そうか、新月なのか」

「別に何ってわけじゃないが、月が無いってのはどうも気味が悪いな」

「お前もそう思うか？ 俺もそう思ってたんだ。今日の夜は、特に気味が悪いって」

常連客同士の会話は、聞こえなくともヒトミの耳に入ってくる。彼らはアルコールも入り、うまい料理を食べたせいで、気分が高揚して声が大きくなっていた。

「昼間は結構風があつたのに、夜になったらぴたとそれも止まってる。なんだか、薄気味悪いよな」

「なんだ、お前怖いのか？」

「は？ 別にそういう話じゃないだろう」

「怖いんだったら、今すぐ家に帰って寝たらだろうだ」

「お袋さんに子守歌でも歌ってもらってな」

そこで常連客同士の笑い声が一斉にわき起こり、重なり合つて店内に響き渡つた。ヒトミも笑つたが、どこか心の中に引つかかるものがあつた。この最近、ふいに思い出すあの一節が、頭の中でぐるぐると巡っている。不吉な予感のようなものが、彼女の心に影を落とした。

「どうした」

アルゴンは洗ったカップも布巾で拭きながら、ヒトミに声を掛けた。知らず知らずのうちに、ヒトミはコーヒーのデカンターを握つたまま動きを止めていたのだ。

「い、いえ……別に」

「疲れているなら、休め。後は俺がやっておく。夜中も俺が店にいる」

「いいえ。いいの。大丈夫。ありがとう」

ヒトミはデカンターを持って、客の空いたカップにコーヒーを注いで回つた。

常連客が徐々に勘定を支払つて店を出て行つた。皆、陽気に別れを告げて次々にドアを開けて夜の町に散っていった。この町には夜中まで営業しているような娯楽施設はない。日が落ちれば、町はひっそりと息を潜め、明かりは街灯の乏しい光りだけとなる。その中

で、唯一この店の「ムーン・ナイト」という店名のネオンだけが、煌々と夜を押し退けている。

客のいなくなった店内には、まだ客達が残っていた陽気な感情の残り香のようなものが漂っていた。そしてテーブルにある皿やカップやグラスや灰皿が、抜け殻同然にそこにあり続けた。ヒトミとアルゴンは協力してそれらの食器を片付けて始める。そしてアルゴンが洗い物をし、ヒトミがテーブルを拭き、位置を正していった。粗方仕事を終えた時、ドアのベルが来客を告げた。

「いらっしやい」とヒトミがドアの方を向くと、そこには酷く痩せた女性がいた。まるで夜の闇を頭から被ったように、彼女の髪の毛は長く、胸元を覆っていた。ワンピースは黒く、そこから伸びる両腕や両足は、何かの手違いで未完成のまま取り付けられてしまったかのように、不自然な細さをしていた。だが血色は良く、病的は雰囲気は感じられない。

「どうぞ、好きな席に座って」

ヒトミは努めて愛想よく、彼女を店に招き入れた。洗い物をしていたアルゴンが、その女性が入ってきたことを確認すると、洗い物を中断して、冷たいミルクティーを作り始めた。ヒトミが注文を聞こうとペンと伝票を持って彼女が座ったテーブルの脇で待っていると、アルゴンがミルクティーを持ってやってくる。

「あら？ もう注文していた？」

アルゴンはちらとヒトミを見たが、特に何も言わずにグラスとガムシロップがたっぷり入った容器を二つ置くとカウンタに引っ込んでしまった。

「覚えていてくれたんですね」

彼女の声は冬の空気のように冷たく澄み切っていた。ヒトミは彼女が愛おしそうにガムシロップをグラスに入れる姿を見つめ、そして彼女とこの前店の入口ですれ違ったのを思い出した。

「あ、あなた、そういえばこの前も来てくれたわね？ 確か……そう、ラオベルさんのお友達だって……あってるかしら？」

ソフィは丁寧な動きでストローにその薄い唇を当てて、ミルクとシロップがたつぷり入ったミルクティーを飲んだ。

「ソフィといいます」

「ソフィ……本当に、ソフィって言うの？」

ヒトミは突然に舞い込んだその「ソフィ」という単語に、埋没した記憶が反応したことを感じた。

「ごめんなさい。あなたについて、何か疑ってるわけじゃなくて、ただ、あなたが本当にソフィっていうなら、その、すごい偶然っていうか」

「偶然……」

「ええ」ヒトミはソフィの向かい側のソファに座った。「変な話だけど、あなた、よく見るとね、私の知っている人に結構似ているのよ。私はその人のこと、実はほとんど知らなくて写真でしか見たことがないんだけど」

「誰なんです？」

「私の姉よ」

ソフィはストローでグラスの中の氷をつついた。

「お姉さん」

「そう。でも、姉は私が生まれてすぐに死んでしまったんですって。事故か何かで。詳しいことが分からないのは、父も母もそのことについてあまり詳しく話したがいなかったからなんだけど、私も、会ったこともない人についてそんなにしつこく聞くのは良くない思っただから、子供心にね。だから、その時は、姉がいたんだな、っていうくらいしか思わなかったんだけど」

音もなく近づいたアルゴンがヒトミの前にコーヒーを置いた。

「え？ あ、ありがとう」

やはりアルゴンは返事をせずに、カウンタに戻り、カウンタの中にある椅子に座って煙草を吸い始めた。ヒトミはアルゴンが淹れてくれたコーヒーを味わいながら飲んだ。

「しばらくして、母が、私にアルバムを見せてくれたのよ。姉が写

っている写真とか、そういうのを。それから思い出話を聞かせてくれたわ。姉はとても頭が良くて賢かった。けど、それを鼻に掛けることがなくて、それどこから、すごく人懐っこかったって。笑顔がとてもチャーミングだったって。写真の中にいる姉もやっぱり、笑っていたわ。会ったことのない人だったけど、ああ、この人が私のお姉さんなんだなって思うと、すごく親近感が湧いたわ」

「いいお姉さんだったんですね」

「きつとね。私は知らないけど、少なくとも両親はとても可愛がっていた」

「会いたいですか？」

ヒトミはカップに口を付けたまま、上目遣いにソフィを見た。そしてコーヒースプーンをすすり、それを飲み込みながらゆっくりと首を左右に振った。

「分らないわ。会いたい気もするけど、仮に会えるとしても会わない方がいい気もする」

ソフィは先ほどからストローでグラスの中を弄んでいるだけだった。ヒトミは彼女の目の奥に永久凍土のような果てしない悲しみが見えるような気がした。どうして彼女はここまで悲しい目をしているのか、ヒトミには分からなかった。

「ごめんなさいね、変な話をして」

「いいえ、そんなことはありません。お姉さんは、きつと喜んでいますよ。あなたのことを自慢の妹だって、天国のお友達に言いふらしているかも」

「そうかしら？」ヒトミは恥ずかしそうに笑った。

「ええ。町の人に愛されているし、いい旦那さんもいるし、ねえ見て、あれが私の妹なのよ。って」

いい旦那さん、というソフィの表現にヒトミは笑った。ヒトミはカップを傾けながら、カウンタの中にあるアルゴンの姿を盗み見た。太く大きく角張った指の間に小枝のような煙草が挟まっているのが見える。煙を天井に向かって吐き出しているのが見える。半袖のシ

ヤツはがっしりとした彼の躰にぴたりと張り付き、今にも破れてしまいそうなくらいに膨張していた。

「まあね。でも、愛想がないわ」と小声でヒトミは言った。

「そんなことありませんよ。町の誰もが、この店を好んでいるし、この店の人を慕っています。それはあの人に本質的な優しさがあるからです。もちろん、あなたにも」

「もう、あんまり担がないでよ。恥ずかしいじゃない」

「本当のことです。だから、一緒になったんじゃないやありませんか？」

本質的な優しさがどんなものか、ヒトミには分からなかった。だが、アルゴンは不器用ではあるものの、誰よりもヒトミ自身を理解し、受け入れてくれたことは確かなことだった。我が子が消息を絶ち、そしてもう決して見つかることが無いと直感的に悟った時、ヒトミは誰も立ち入ることの出来ない深い悲しみの中に沈んでいた。

もう誰一人として彼女を引き上げることが出来ないほど、深い悲しみの井戸の底にいたのだ。他の男ならば、もしかすると彼女を助け出すことが出来なかったかもしれない。彼女に声を掛けることはするものの、彼女を光りのもとに引っぱり出すことは出来なかったかもしれない。アルゴンは違った。彼は悲しみにくれるヒトミに何一つ声を掛けることをしなかったが、彼は黙って腕をさしのべ、そして彼女を悲しみの底から引きずり出した。光りに目が眩むヒトミをあつの壁のように大きな躰で抱きしめ、彼女の目が再び光りを見れるよう、献身的に付き添ってくれた。それが本質的な優しさだろうか。「よく分からないけど、まあ、そうね。だから一緒にいるのかも。あの人は何も言ってくれないけど、言葉よりも大切なものを、いつも与えてくれている気がする」

「そういう人に出会えた事は、あなたにとっても貴重なことです。世間はそれを、運命とか奇跡とか言います」

「運命に……奇跡、ね」

ヒトミはコーヒーを飲み干すと、ゆっくりと空のカップを持って立ち上がった。

「そんな大げさなものじゃないわ。私、思うの。愛や恋って、きつとそんな大げさなものじゃない気がする。もつと自然で、普通のことよ。きつとね」

カップの取っ手を指に引っかけて、ぶらぶらとさせながらヒトミは「ゆっくりしていつてね」と言ってカウンタの中に戻った。

ソフィがミルクティーを飲み干すまでの間、ヒトミはカウンタに座り雑誌を捲りながら、カウンタの中で何本目かの煙草を吸うアルゴンの姿を見るともなく見ていた。彼の姿は、生まれてくる時代を間違えた武人のように屈強だった。拳を握れば、まるで岩石のようにごつごつしているし、眉間や目元や頬にある皺の数々は彫刻刀で刻まれた溝のようだった。分厚い胸板や、壁のように大きな背中。その中にヒトミが二人は入りそうなくらい、大きな躰だった。昔、結婚を決めた頃、彼の実家に挨拶に行ったときに彼の両親がアルゴンの幼い頃の写真を見せてくれた。そこには、子供に似つかわしくない不機嫌そうな顔をした少年の写真が何枚も貼られていた。両親は笑いながら言った。「この子は滅多に笑わなかった。けど、自分が作った料理を褒められた時、その時だけは、笑ったわ。父親はそれを見て家業を継がせることを諦めたの」アルゴンの家は大工をやっていた。アルゴンの父親も、若い頃はアルゴンのようにあるいはそれ以上に頑丈な躰をしていた。アルゴンの屈強な躰は間違いなく父親譲りだった。物心ついたころには大工道具を握らされ、父親の指導のもと、彼は家業を継ぐために色々なことを仕込まれたらしい。母親はその時の様子を思い出しながら、ヒトミに優しく語りかけた。「アルゴンはいい子よ。私や父親の言いつけをしっかりと守ったし、反抗することもなかった。だからこそ、父親はあの子に家業を継がせることをやめたの。きつとアルゴンは、私達がそう言えば、家業を継ぐことを素直に受け入れたでしょうね。けど、それじゃああの子のためにならない。お父さんはそう言って、あの子の好きなことをやらせることにしたのよ。それにこうも言っていたわ。大工も料理人も、誰かのために何かを作ると言う意味では大して違わない、

つて。カンナや金槌や杭が、包丁とかフライパンとかミキサーとか
そういうもの変わるだけ、木材が食材に変わるだけだ、つて。そ
う言った時のお父さんの目は、とても晴れ晴れとしていたわ。だか
ら私も言つてあげたの。あなたやあなたのお祖父様や、曾お祖父様
は、もう長いこと大工をやりすぎたつて。これから別の仕事に変わ
つたとしても、誰も何も言わない。それに、家は一度建てたらしば
らくそのままだけど、料理は作つたそばからなくなっていく。だか
ら次々に作らなくちゃいけないから、仕事が無くなることがなくて
いいじゃないつて」アルゴンの母親はそういつて笑つた。その頃、
彼の父親は病院にいた。年齢的にも死が間近に迫つており、若い頃
の頑丈で大きな躰は見る影もなく萎んだ風船のように華奢な躰が病
院の白いベッドに収まつていた。ヒトミがアルゴンの父親に会うこ
とが出来たのはたつたの数回だつた。「ヒトミさん。もしあいつが、
浮気でもしようものなら、もう容赦なんてしないで、十発でも二十
発でも殴つてやってくださいな。あいつは手先の器用さと、躰の頑
丈さだけが取り柄の、息子なもんでね。それに私もね、若い頃は何
度か馬鹿をやらかして、かみさんにしこたま殴られたもんだ」それ
がヒトミの聞いた、アルゴンの父親の最期の言葉だつた。

「ごちそうさまでした」

ソフィの言葉が、ヒトミを現実世界に引き戻した。どうやらヒト
ミは、知らないついにうたた寝をしていたようだつた。ヒトミは立
ち上がつて、ソフィから金を受け取つた。

「また来てちょうだいね」

「はい。そうします」

ソフィを店の外まで見送るため、ヒトミは彼女と一緒に店を出た。
全くの無風で、生暖かい空気が行き場を無くして町全体に滞ってい
るようだつた。ヒトミは客の話を思い出して、空を見上げた。夜空
はどこまでも暗く、まるで町そのものが深い深い井戸の底に沈んで
しまったような錯覚を覚えた。

「今日は新月です」

「ええ、そうみたいね。お客さんが言っていたわ。とても気味の悪い夜だって」

「出来れば、すぐにお店を閉めて、お二人とも家に帰った方がいいと思います」

ヒトミは笑いながら、視線を夜空からソフィに移した。しかしソフィの表情があまりに真剣だったために、ヒトミの顔から笑顔が消えた。

「どうして、そう思うの？」

「今日の新月は、特別だからです」

漂うぬるい空気は、確かに異質であり、日常と乖離した不気味さを醸し出していた。ソフィの言葉は、笑って一蹴するにはあまりに現実味を帯びていた。彼女の言うとおり、今日の新月は特別だ。間違いない。

「そうね。こんな日は、家でじっとしているのが一番ね」

「誰かが尋ねてきたら、その時はドアを開けてください」

「誰も尋ねてこないわ」

「仮に、です」

「……分かったわ。仮に、誰か尋ねてきたら、ドアを開けるわ」

「変なことを言ってますみません。でも、私の言っていることは間違つてはいません」

ソフィの真剣な表情は、じっと見ているとまるで家族を氣遣っているかのように切実な色を帯びていた。

「私もそう思うわ。あなたの言っていることは、間違いない」

ヒトミが頷くと、ソフィはほっとしたのか微笑んだ。

「あなたとお話できて良かった。やっぱり、父が言ったように、あなたの瞳はとても美しい。旦那さんを大切にしてください」

ヒトミの返事を待たずに、ソフィは踵を返して去っていった。ヒトミは別れの言葉を言おうとしたが、彼女が言った言葉が頭の中にとくと残響となって響き続けていたために、何も言えなかった。

ヒトミは何かに気づき「ちょっと待って！」と叫んだ。しかし、

もうソフィの姿はどこにもなかった。町はただ、ぬるい空気に満たされ、不気味で異質な空間に埋没していた。

店の中に戻ると、アルゴンが煙草を消して立ち上がった。

「帰ったのか」

「ええ」

ヒトミはぼうつとした表情のまま、アルゴンの正面のカウンタのスツールに座った。アルゴンは彼女に「どうした」とか「何があった」とかそういう類の言葉は言わずに、黙って彼女の正面に立って、カウンタ越しに彼女を見下ろした。

「ソフィって、あの子、そう名乗ったわ」

「知り合いだっただのか？」

「いえ。知らない、はずよ」

「少なくとも、あの子はラオじいさんとは無関係のはずだ」

「そうなの？」

「客に聞いた。ラオベルは孤独だった。あんな若い子がラオじいさんと話していたら、誰かが気づく。でも誰も知らなかった。そればかりか、彼女のことを知る人間がこの町にはいない」

「そう……」

ヒトミは一度、アルゴンの顔を見上げて、またすぐに俯いた。

「あのソフィという子を、お前は知ってるんじゃないか」

「私の知っているソフィは、もう死んだわ。私が生まれた時に」

「お前のお姉さんだろう」

「そうよ。ソフィ・リンジェル。私の姉。でも、彼女は死んだ。私が生まれた時に、事故で死んだ。でも、その事故がどんなものだったのか、親は話してくれなかった。もしかすると、『壁』に飲み込まれたのかもしれないわ」

「『壁』の話はやめろ」

「……そうね」

ヒトミは立ち上がった。そして、顔を何度かこすると、アルゴンの方へ振り向いた。

「ねえ、久しぶりに一緒に飲まない？ お店を閉めて、二人だけで」
「どうしたんだ急に」

「こんな夜にお客さんなんて来ないわ。ねえ、たまにはいいじゃない」

アルゴンはヒトミの目をじつと見て、それから観念したように首を左右に振った。「分かった」そう言うときアルゴンは、カウンタの奥にある配電盤のスイッチを切った。店の外にあるネオン管が光りを失い沈黙した。アルゴンはエプロンを脱いで、カウンタに投げる。ヒトミもそれに習ってエプロンを脱いだ。いくつかの点検をし、最後に店をぐるりと見渡すと、再び配電盤のスイッチを操作した。店内の照明が順番に消えていき、たちまち店は外の暗闇と同じ暗さになった。二人は揃って店を出た。そして店の横にある階段を昇った。「こういう時のために、とっておきの酒を用意してあるんだ」
「とっておきのお酒？ いつの間にそんなの買ってたの」

「備えあれば何とやら、さ」

「高かったんじゃない？」

「そうでもないさ」

「あなたがそう言うときって、大体が高いものを買ったときよね」

「そうでもない。本当さ」

「いいわ。今日は許してあげる」

二人は並んで階段を昇り、最上階の自分たちの家に帰っていった。ドアが閉まり、辺りはしんと静まりかえる。もうこの町に光りを放つものは一つとして無くなった。まるで図ったかのように、町は真の暗闇に包まれた。月明かりも、人工的な明かりもない。町に点在するマッチ棒のような街灯だけが、唯一の光りだったが、それらのせいで夜の闇はより深いものになっていた。

ヒトミとアルゴンの家のドアが閉まるのとほぼ同時に、男の家のドアが開いた。

「お前のような不適合者が戦士としての使命を全うできるかどうか甚だ疑問だが、改めて『月の無い夜』における戦士の使命を説明しておこう」

開いたドアから大きな黒いケースを持った男が出てくる。彼は特に鍵を掛けることもなく、そのまま階段を下りていった。階段を下りると、いつもは明るいダイナーの電気が全て消えていることに気づいた。どういう理由かは不明だが、店を閉めたようだ。これは男にとって都合がよかった。このまま夜が明けるまで、あの二人が自分たちの家で、しずかに過ごすことを男は願った。

「すでに『壁』は蠢いている。光りを失った町は、『破片』にとって格好の場所だ。これから夜の闇はさらに深くなり、深くなった闇はあらゆる境界を消し去っていく。そうなった時、町を形作る家々の壁は壁でなくなり、『壁』となる。『破片』は境界を失った人家の『壁』を通り、寝静まる人間を連れ去っていくのだ」

男の服は上下とも暗色のもので、上着として着ているパーカーのフードを目深に被っていた。そのせいで彼もまた、夜の闇に同化して見えた。ただ彼の真っ直ぐ前を見る眼光だけが、街灯の乏しい光りを受けて怪しげに煌めいていた。しかしそれも、歩を進め街灯を通り過ぎると再び漆黒に染まっていった。

「『破片』が生まれるまでもう時間がない。急いだ方がいい。言っておくが、あの女の言葉は忘れる。『破片』に生も死もない。あるのは奴らが『破片』であるという事実、それだけだ。『破片』を碎き、原始の光りに還すことが、ある意味では『破片』を救うと言ってもいい。いいか。お前は戦士として『破片』を碎くことだけに集中しろ。それ以外の事は考えるなよ」

しんと静まりかえった、深い海の底のような町において、男が歩を進める足音だけがくつきりとした輪郭を持って響いた。他に聞こえる音は何もなかった。風もない。虫の鳴き声も、野良猫や飼い犬の気配もない。彼らはみな、これから訪れる災いを察知してか、

存在すら消えてしまったかのように息を潜めている。人家から悉く光りは消え失せ、この町はさながらゴースタウンだった。

立入禁止の看板を跨ぎ、男は『壁』に近づいていく。

そして『壁』の前にやってきた男は、眼前の光景に表情にこそ出さなかったが酷く驚いた。目を見開き、息を呑んだ。

『壁』が重量感を失い、風にはためく布のように波打っているのだ。

「来るぞ。準備をしろ」

言われるまでもなく男は身の丈を超える巨大なケースを地面に突き立て、いつもの通り、ケースが自動的に開くのを待つて、生じたその隙間に右手を差し込んだ。引き抜いた『剣』を構える。深く呼吸をし、心臓の高鳴りを制御する。奥行きのない扁平な黒い空を見上げる。月はおるか星の瞬きさえ消えた空は、もはや空と呼ぶことすら躊躇われるほど陰鬱なものだった。

波打つ『壁』の一部がこちら側に向かって細長く隆起した。次第にそれは手のような形に変わり、空気を掴むようにもがきながら、腕が、肩が、そして軀が現れ始める。最初の『破片』が出てくると堰を切ったように『壁』の至る所から『破片』が姿を現し始めた。「始まった。『月の無い夜』が」

『壁』から出てきた『破片』が、具体的にどんな姿であるかは闇に紛れているせいではほとんど見えなかった。ただそこには人でも動物でもない異質な生命の息づかいがあった。

男は『剣』を振りかざし、最初の一体を横薙ぎに砕いた。骨の折れるような鈍い音がして、直後、細かな光りの粒子が空中を彷徨うに発生する。光源と呼ぶには粒子の発する明かりはあまりに乏しかった。

初めの『破片』を砕いた後の男の動きは、一切の迷いが感じられないほど滑らかだった。次々に生じる『破片』を次々に砕いていく。木っ端微塵に砕かれた『破片』は光りの粒子に成り代わり、空中を所在なさに漂いながら、徐々に暗闇に覆われた天空に昇っていつ

た。

「そうだ。それでいい。それでこそ、戦士だ」

頭に響く声を無視して、男は『剣』を振るった。

「どうして……どうして……約束が違うわ」

男は振り返らずとも背後で聞こえた声の主が誰であるか分かった。ソフィは男に駆け寄り、彼の腕を掴んだ。

「止めて。生きている『破片』もいるのよ？　まずそれを見極めて」

「この女の言葉に耳を貸すな。この女は、呪われた魔女同然。そんな者の言葉に耳を貸す必要などない」

「聞いて。あなたは、『破片』を救うことの出来る唯一の戦士よ。あなたじゃなければ出来ないことなの。戦士でありながら、人の心を持つているあなただから出来る。信じて。自分の事を信じて！」

しかし男は叫ぶソフィの腕を振り解き、次々に現れる『破片』を片っ端から木っ端微塵に砕いていった。時に鉄槌のように振り下ろし、時にナイフのように素早く横に振るい、それに合わせて『破片』は様々に散っていき、後には粒子だけが彷徨うだけだった。

「どうして！　あなたには分かっているはずよ。どれが生きている『破片』で、どれが本来の『破片』なのか。それなのに、どうして砕いてしまうの！」

「黙れ小娘。これが戦士なのだ。『破片』は碎かれる。それがどんなものであっても、『破片』である、それだけで碎かれるには充分過ぎる理由になるのだ」

ソフィの声が男に届いているのかどうか、傍目には分からなかった。彼の表情のほとんどがフードの影になって見えなかったし、彼は一度たりとも『破片』を碎く作業をやめなかった。町へ行こうとする『破片』を背後から碎く。彼らの歩みは、男にとって止まっているも同然だった。しずかな町に瓦礫が崩れるような音と、男が地面を踏みしめる音と、そして男のかすかに荒くなった呼吸とが、淡々と響いた。ソフィはもう、何も言わず、あらゆるものに絶望した眼差しで男を見ていた。「どうして」という虚しい言葉を呟いてい

ては、目の前で起こる現実を否定しようと目を覆い首を左右に振るばかりだった。

男の作業はその後、三時間ほど続いた。薪を割るみたく、男はとにかく目の前に現れた『破片』を砕き続けた。

そして、『壁』から『破片』が現れるなくなると、今度は振り返り町を見据えた。

「この前砕き損ねた『破片』がまだ町にいる。そいつを砕けば、もう粗方仕事は終えたと言ってもいいだろう」

走りだそうとする男の前に、ソフィが立ちふさがった。

「待つて」

男は立ち止まった。フードの間から垣間見える彼の表情は陰しく、冷たい目をしていた。

「あの子は、両親に会おうとしている。だからお願い。砕くことをしないで」

ソフィの切なる願いは、しかし男には届いていないようだった。

男は止めた足をまた動かし、彼女の横を通り抜けていく。もはやソフィは彼を止めようとはしなかった。その代わりに、彼女は果てしない絶望に彩られた深いため息をついた。

「あなたは、他の戦士よりもたちが悪いわ。出来るのに、それをしようとしな。救えるのに、救おうとしな。そればかりか、全員を殺して回っている。あなたは戦士という名の、ただの殺人鬼よ」

ソフィは波打つことをやめた『壁』見つめながら、吐き捨てるように言葉を発した。

「戦士にも、あなたにも、絶望したわ」

男は走り去った。

琥珀色の液体が満たされたグラスを傾けながら、アルゴンとヒトミは三人掛けの大きなソファの中央で、寄り添っていた。テレビも

音楽もない部屋に聞こえるのは、二人の息づかいとグラスの氷が揺れる音だった。

「さっきね、カウンタでちょっと寝ちゃったときにね、夢を見たの」
ヒトミはアルゴンの耳元で、内緒話をするように囁いた。耳にかかる吐息がくすぐったいのか、首を傾げながらアルゴンは微笑んだ。それが微笑んでいると分かるのは、アルゴンの両親と、ヒトミだけだ。

「どんな？」

「あなたのことよ」

「俺の？」

「そう。あなたの事や、あなたのご両親の事。初めて、あなたの実家に挨拶に行ったときの事とか、そういうの」

「退屈そうな夢だ」

アルゴンはグラスの中身を飲み干した。そしてソファの前にあるアイスペールから氷をいくつか素手で掴みグラスに放り込むと、横に置いてあるでっぷりと太ったボトルの中身をグラスに注いだ。

「退屈じゃないわ。とても、いい夢よ」

「そうは思えないな」

アルゴンはグラスを揺すった。氷に亀裂が入る鋭い音が二度三度響いた。

「ご両親はとてもいい人だったし、お父様の若い頃はあなたそっくりだった。それから、あなたの子供の頃の写真をお母様に見せてもらった時のことも夢に見たわ。あなた、全然笑ってないの。それをお母様と一緒に笑ったのよ」

「カメラを向けられることのどこが面白い？」

「大体は笑うものよ。面白くなくても、カメラを向けられたらね」

「じゃあ俺は、その大体っていうものから外れているんだな」

「そうみたいね。仏頂面で。こんな感じ」

そう言ってヒトミは、眉間に皺を寄せて、ぐっと中空を睨んだ。数秒後、破裂するように声を上げて笑った。「どう似てる？」とヒ

トミはアルゴンに言った。

「やめてくれ。似てないし、俺はそんな不機嫌そうな顔はしてない」
「嘘よ。あなた、これよりもっと不機嫌そうな顔をした。それも遊園地よ？　メリーゴーランドとか、コーヒークップとか、ジェットコースターとか、そういうのに乗ってる時のあなたの表情っていったら……もう、あれは傑作ね」

そういつてまたヒトミは笑った。こみ上げる笑いを押さえ込むように、彼女はグラスに残った酒をぐっと飲み干した。

「つまらなかったんだ。しょうがないだろう。飲むか？」ヒトミはグラスを差し出し「お願い」と未だに笑いを引きずったまま言った。ヒトミのグラスに氷を入れて、酒を注ぎながらアルゴンは「世の中の子供が全員、ああいうので喜ぶと思ったら大間違いだ」と少し大げさに表情を作った。アルゴンからグラスを受け取ったヒトミは「ありがとう」と言つて、ソファに身を預けて、半ば寝そべるようにしながらグラスの氷を指で動かしていた。

「あなたは特別よ。大体の子供は喜ぶの」

「俺はあらゆる大体から外れていたんだな」

「そうよ。あらゆる大体から、外れてた。その後、遊園地のレストランで食事をしてた時の写真もそうよ。あなた、まるで砂を噛んだみたくともない顔をしてたわ」

「あれは酷かった。今でも覚えてる。あんなの料理とは呼べない。ハンバーグは水に浸したみたく嘘みたいにくじが出たし、サラダはそこらに生えてる雑草に油の塊みたいなマヨネーズがこたまかかった。そんな料理がとてつもない値段で平然と売られているなんて、俺は愕然としたよ。本当だ。あんなのを客に平然と出すなんて、どうかしてる」

「子供は喜ぶのよ」

「ハンバーグに国旗が突き刺さってる意味も分からない」

「意味なんて無いわ。子供はそういうのを面白がるのよ」

「うまい料理を食べれば、子供だろうが大人だろうが、喜ぶ」

「そうね。確かに、あなたの言うとおりだわ」

指についた酒をなめて、ヒトミはグラスに口を付けた。

「あなたのそう言うところ、私、好きよ」

「そういう意見は珍しい」

「みんな気づいていないだけ。私はそう思うわ。あなたは？」ヒトミは軀を起こし、アルゴンの肩に顎を載せて「私の事、どう思っているの？」と言った。

「さあね」

「教えて」

「好きさ」

「本当に？」

「本当に」

「もつと具体的に言つて。どこが、どういう風に好きなの？」

アルゴンは酒を飲んだ。自分の中に散らばる考えを一つにまとめ上げるための儀式であるのかのように、酒を飲んだ。そして、グラスの中の氷を見つめた。

「分らない」

「分らない？　ちよつと、そんなのつて無いわ」

「分らないんだ。どう好きなのか。どこが好きなのか。だが、これだけは言える。俺は、お前のためなら何だつて出来る」

「何だつて？」

「そうだ。お前が望めば、俺は何だつて出来る。法を犯そうが、誰かが迷惑を被ろうが、知った事じゃない。お前のためだけに生きられる」

「やめてよ。そんな物騒な話」

「ならやめよう。君が、そう望むなら」

ヒトミは微笑んだ。そして実に優雅な手つきで、アルゴンからグラスを取り上げると、自分のと合わせてテーブルに置いた。彼の大きな軀に自分の軀を密着させ、彼の顎の下に自分の顔をめぐり込ませた。上目遣いにアルゴンを見る。

「私が望めば、何でもするのね？」

「ああ。何でもだ」

ヒトミは身をよじらせアルゴンの耳元に口を寄せた。「じゃあ、キスして」呪文のように囁かれた言葉に、アルゴンは従った。拒む理由もなく、アルゴンはヒトミの唇に自分の唇を重ねた。一度、軽く触れ合った唇は、次の瞬間には互いを求めるように激しく絡み合った。こみ上げる愛情を何とか表現しようと、お互いにお互いの体をまさぐり合う。唇はそれに呼応するように、唾液を交換するように、ひたすらに密着していた。唇を離さずに、二人はそれぞれの着衣を脱ぎ始める。いままでの静寂が嘘のように、二人は激しく息づいた。呼吸のために離れる唇は、しかしまたすぐに密着する。もどかしそうに、二人は服を脱いでいった。

インターホンが鳴った。

ぴたりと二人の動きが止まった。

「誰かしら？」

「誰でもいい」

アルゴンは再び、ヒトミを求めた。しかしヒトミは、ソフィの言葉を思い出していた。誰かが尋ねてきたら、ドアを開けるように、と彼女は言っていた。アルコールでばやけていた彼女の思考は、しかしはつきりとソフィの言葉を思い出していた。

「ちよつと見てくるわ。何か急用かも知れないし」

ヒトミは脱ぎかけたシャツを直しながら立ち上がろうとしたが、アルゴンがそれを制した。

「分かった。俺が見てくる」

アルゴンは上半身裸のまま、ソファから立ち上がり、ベルトを締め直しながら廊下を歩いた。ヒトミは彼の筋肉質な背中をじっと見つめていた。しばらくして、アルゴンが戻ってくる。

「誰だったの？」

「いや、誰もいなかった」

「誰も？ 本当に、誰もいなかった？」

「ああ。誰もいなかった」

「そう」

その瞬間、ヒトミの頭の中からソフィの言葉は消えていた。ヒトミは立ち上がると、背伸びをしてアルゴンのキスをした。

「ソファじゃあ、ちよつと狭いわ」

「そうか」と言っ、アルゴンはヒトミを軽々と抱き上げた。「俺もそう思っていたんだ」

ヒトミは吐息を漏らすように微笑むと、アルゴンの胸に愛おしうに頭を付けて、そしてアルゴンに抱かれたまま、二人は寝室に向かった。

ダイナーのある建物の屋上に、男はいた。男の目の前には、少年が立っていた。少年の輪郭はぼやけていて、空間と少年の境目にはかすかな光が入り込み、彼の存在を暗闇から切り抜いていた。男の方はと言えば、右手に『剣』を握り、表情はフードを被っているせいでよく見えなかった。だらりと力なく立ちつくす男について、少年は既に何もかも知っているように微笑んだ。

「君が、この町の戦士なんだね」

少年の声はあどけなく幼さに溢れていたが、不思議と言葉の一つひとつに不釣り合いな時間の流れを感じることが出来た。彼もまたソフィと同じように『壁』の中に長く捕らわれ、現実と乖離した時間に何十年と曝されていたのだろう。

「砕く？」

首を傾げる少年。彼をじっと見つめる男。少年の服装は数十秒毎に履気楼のようにぼやけながら、変わっていった。コミカルなキャラクターが印刷されたシャツやアルファベットが胸元全体に印刷された長袖のシャツ、細かなボーダーのパーカー、はつきりとした色合いのセーター、ジーンズやサスペンダー付きの半ズボン。『月

の無い夜』の影響で、彼にまつわるあらゆる時間の境界線が曖昧になっていくのだろう、と男は推測した。少年はくると回って、屋上の柵を両手で握った。

「いいよ」

「僕は、迷っている。君を、砕くべきかどうか」

「戦士なの？」

「戦士なのに」

柵を両手で握り、その間から町を見下ろす少年の姿は正面から見ればさながら、いわれのない罪で投獄された哀れな囚人のようだった。月明かりも、町そのものの明かりもないせいで、町全体は海底に沈んだ古代都市のようにあらゆるものが過去のものに見えた。しかし、実際に海底に沈んでいるわけではない。あと一時間もすれば、東の空に一日の最初の光りが昇り始める。真新しい、出来たての光りが、この世界を再び照らすだろう。

「ソフィという女性が、僕に言った。僕は、特別な戦士だと」

「かもね」

「君が望むなら、僕は君を砕かない」

「僕が生きた『破片』だから？」

「そうだ」

「何を言っているんだ？ お前は戦士なんだぞ。躊躇うことも、迷うこともない。ただ目の前の『破片』を砕けばいいんだ」

少年は振り向き、柵に背中をもたせなければら「『剣』は怒っているみたいけど？」とくすくす笑った。

「正確には、僕の中の戦士の意味、だよ」

「もちろん知ってる」

二人の間で交わされる言葉は、どれも短く、意思の疎通と呼ぶには心許ない。だが不思議と、二人にはそれぞれの考えることが分かっているようだった。

「迷うことはないよ。君は戦士なんだし。ソフィお姉ちゃんが僕や僕のような生きた『破片』を救おうと、自らの危険も顧みずに君に

お願いしにいったことは、とても感謝してる。けれど、僕はどちらかと言えば、君の考えに賛同する」

少年は何もない空を見上げた。

「『破片』は、戦士に碎かれるべきなんだ。生きていようと、死んでいようと」

「本当にそう思う？」

「君だって、そう思っているんだろう。戦士としてでなく、君自身の心が、そう思っている。僕には分かるよ」

男は『剣』を握る手に力を込めた。

背後から足音が聞こえた。階段を昇る破線のような足音が扁平な夜の空気を揺らし、屋上へと続くドアが開かれた。息を切らしてやってきたのは、ソフィだった。少年は男の背後にいるソフィの姿を見て、笑った。

「お姉ちゃん」

「大丈夫よ。彼が助けてくれるわ」

「お姉ちゃん。僕は、確かに生きているかもしれない。けど、僕にはもう、帰る場所がないんだ」

「だとしても、生きていれば、何とかなる」

少年は何もかも悟ったように首を振った。

「何とかなる保証はどこにもないよ。帰る場所がない者は、ただ町を彷徨うだけ。それはどこにも行き着かないし、どこにも旅立つことが出来ない。求める人がいなければ、意味がない」

「あなたは求められているわ。あなたの両親は、あなたの帰りを待ちわびている」

「仮にそうでも、一度死んだ人間が再び暮らすには、この世界はあまりに複雑だし、込み入っていると僕は思う」

「悲観的にならないで」

「悲観的じゃない。現実的、だよ。そしてそれは、彼も分かっていることだ。ね？ そうでしょ」

男は肩越しにちらと背後を見て、そして少年に近づいた。

ソフィは口元に両手を当てて、これから起こることを拒絶するように首を左右に振った。「やめて……」とソフィが言ったように男は聞こえた。

少年は静かに両目を閉じた。

男は『剣』を振り上げた。

ソフィは強く両目を閉じた。

『剣』は弧を描き、振り下ろされた。

少年は跪いた。少年と現実の境界線にある穏やかな光りが、少年自身を包み込み、次第に細かな粒となって彼の軀から離れていった。光りの粒は少しの間、暗闇を彷徨い、天へ昇っていく。

男とソフィは少年が原始の光りに変わって、空へ昇っていく様をずっと見ていた。少年の姿が完全に消えるまで、どれだけの時間が掛かっただろう。いずれにせよ、光りが消えてしまうと世界は再び深い闇に閉ざされてしまった。男は『剣』を地面に突き刺して、深い深いため息をついた。

「『壁』は力を失いつつある。あとは、その女を砕けば、この町にいる全ての『破片』を砕いたことになるだろう。そこでお前の戦士としての使命は一応の終わりを見せる。さあ、最後の『破片』を砕け」

男は、今まで少年が立っていた場所に移動し、彼が跪いていた場所を見下ろしていた。何もなく、亀裂の入ったコンクリートの地面があるだけだった。そして墓標のように突き刺さった『剣』を見つめ、その向こうにいるソフィを見つめた。

「これが、僕の答えなんです」

沈黙。男の言葉は不自然に空中を浮遊して、どこかへ消えていった。

「私は、最初から分かっていたのかも知れない。こうするしかないことを。『破片』が生きるには、この町は、この世界は、とても複雑になってしまった。『壁』に飲み込まれることは、死ぬことと同じ。誰もそこに、望みを託さない。生きていくかも知れない、とい

う望みを託すことはない」

「僕は、戦士だし、町の人には町の人の生活がある。それはもう完結してしまっている。一度、存在が消えてしまったら、その完結した輪の中から出てしまったら、もう戻ることは出来ない。言い換えれば、僕には責任を負うことが出来ない、ということです。生きるという、けれどもどう生きればいいかを示すことが出来ない」

出し抜けに一陣の風が二人の間を吹き抜けた。町は本来の町に戻ろうとしていた。『月の無い夜』が終わりを告げようとした。東の空が明るんでくる。空にびっしりと詰まっていた暗闇の塊が、彼方へ追いやられていく。

「あなたのしたことは、正しかった」

ソフィは両目に溜まった涙を拭った。そして、『剣』のすぐ手前まで歩き、忌々しい視線で今もってあらゆる光りを拒もうとしている『剣』を睨んだ。

「私を碎けば、全てが終わるわ。あなたはあなたの人生を歩むことになる。それでいい。あなたは他の戦士とは違っていた。さっきのこと、謝るわ。絶望した、なんて言って、ごめんなさい」

男は明かりを取り戻し始める空を見た。

「さあ、早くしろ。『破片』を碎き、『剣』をケースに戻すんだ。

そしてお前は、新たな町に旅立つことになる」

そんなことは分かっていた。誰に言われるまでもなく、戦士の宿命というやつを男は深く理解していた。男は『剣』の柄を握った。引き抜こうと力を込める姿勢のまま、何かを考え込むように動きを止める。

「何をしている。早くやれ」

軀の中からこみ上げる言葉を無視して、男はソフィを見た。

「一つ、教えてください」

「何？」

「もし僕が、あなたとこれからもずっと一緒にいたと言ったら、そうしたら、どうします？」

ソフィは目を見開いて驚くと、すぐその後に笑った。

「何を言っているの？」

「答えてください」と言った男の表情は、酷く真剣だった。「大事な事なんです」

「そうね……」

ソフィは東の空を見た。もう日の出が始まっている。もう少しすれば、この屋上にも鋭い朝日が、鋭利な刃物となって残存する夜の闇を切り裂いていくだろう。

「無駄な問答をしている暇はない。早くするんだ。『剣』が朝日に曝されたら、どうなるか分かっているだろう」

「答えてください」

ソフィは目を伏せて、しばらくの沈黙の後、ゆっくりと口を開いた。遠くで一羽の鳥が鋭く鳴いた。朝を告げるように。ソフィの言葉は鳴き声にかき消されたが、男には届いていた。男はフードの奥で、かすかに笑った。

そして『剣』を抜いた。

『剣』の切っ先が、ソフィの胸を貫いた。ソフィの躰がそれに合わせて、大きく一度、震えた。二人の間に流れる時間が、停止した。「よくやった」という声は、男の中で次第に困惑の色に染まっていた。「何をしている。早く抜け。『剣』を抜かねば、『破片』は光りに還らんぞ。何をしている。朝日が、『剣』を侵していく。早くしろ、早く！」

東の空を染めていた明かりが、より確かなものとなった。太陽が顔を覗かせ、町に新鮮な光りをもたしていく。そしてそれは、まるで針金のようにか細い光りでありながら『剣』を貫いていった。

「何をしている！ 早く抜け！ ケースに『剣』を戻すんだ！ 早くするんだ！」

ソフィは躰に突き刺さった『剣』と男の顔を交互に見つめた。

「あなた……」

「一人ぐらいになら、責任を持って、生きると言える」

『剣』を貫くか細い光りは、次第に大剣のように頑強なものとなつていった。『剣』を覆う黒い何かに亀裂が入った。それは声が言うところの「朝日が『剣』を侵している」という状態だった。

「馬鹿な……こんなこと、許されると思っっているのか。本当に、こんなことが」

声は輪郭を失い始めていた。ノイズが混じり、声が声としてのありようを失い、それはもはや遙か彼方から聞こえる怒号のように、無意味なものになっていく。『剣』を覆う黒い破片が太陽の光で次々に剥がれ落ちていった。ソフィの背中から黒い粒子が吹き出し始める。

「やめろ。やめるんだ！ こんなこと、許されることではない。戦士としての宿命に抗うなど、何人たりとも許されることではないのだぞ！」

『剣』から次第にその巨大さが失われていき、徐々に姿を現したのは金色に輝く細身の刃だった。まるで太陽光そのものであるかのように、真っ直ぐの黄金に輝く刃は、もはや誰にもその輝きを止めることが出来なかった。一度輝き始めた刃は、その周囲を取り巻く暗黒物質を次々に拒絶し始める。暗闇が光りを拒絶するように、光りもまた暗闇を同じように拒絶していった。

「やはりお前は、戦士などではない……『破片』と同じ、おぞましい……人間をも下回る……愚かで……救いようのない……無価値な……存、在」

声が、完全に消えたのが分かった。

同じように、『剣』を覆っていた暗黒が全て、完全に剥がれ落ちていた。後に残ったのは、金色の刃。美しく燦然と輝く、太陽そのものであるかのような、黄金の刃だけだった。

ソフィの背中から溢れ出る闇の粒子も、全て排出された。

男は黄金の刃をソフィの軀から引き抜いた。それに合わせて、ソフィの軀が弓のように反った。刃が抜かれると、ソフィは自分の胸に指を這わせた。そこには傷など一つもなく、血も流れず、痛みも

ない。あるのは、穏やかな温もりだった。太陽のもたらす、清々しい、穢れのない温もりだった。

「一体、何が、どうなったっていうの」

「君は、もっと明るい色の服が似合うよ。きっと」

「説明になってないわ」

「もう光りを拒まなくていい。受け入れればいい。何もかも、ありのままに。そして生きてください。僕と一緒に。僕は、僕個人の意思で、君を守り、君の死を見届けます。そして、僕の代わりにこの世界のあらゆる美しい光を見てください」

「代わりに？」

男はソフィに背を向け、フードを取った。彼の姿を見て、ソフィははっと息を呑んだ。彼の頭髮は余すところなく全てが白く染まっていたのだ。まるで最初からそうであつたかのように、あまりに美しく純白に染まっていた。そしてさらに、ソフィは振り向いた男の顔を見て、やはり息を呑み、そして涙を流した。

「ありがとう……本当に、本当に……」

そう言わずにはいられなかった。

男の両目からは黒い涙が流れ、それは頬の辺りで不思議と透明な本来の涙の色に変わり、顎を伝って地面に落ちていった。涙を流す彼の瞳は白い。まるで黒眼が溶け出し流れ出たようだった。彼の目はもう何かを見ることが出来なくなっていた。

彼の右手ある『刃』は、太陽の光を反射した。そして次の瞬間、『刃』の柄から白銀の光りが発生し、それが刀身を包み込んだ。全てが収まると、金色の『刃』は、白銀の鞘に収まっていた。まるでそれは初めからそこにあつたように自然に、男の右手に収まっていた。彼はそれを左手に持ち替えた。

東の空に生まれた太陽は、穢れのない美しい健やかな光りで、町を照らした。

もうこの町に不気味な夜は来ない。

『壁』は本来の壁に戻っていた。それは単なる町と町を区切る境界線だった。蠢くことも、脈打つことも、波打つこともなく、壁は壁としてそこにあった。

壁の前には、墓石を思わせる大きな黒い物体があった。

太陽の光はそこに存在する全ての闇を浄化した。

黒い物体は光りの粒子となり、青空の彼方へと消えていった。

後には何も残らなかった。

あるのは、境界線としての壁と、打ち捨てられたベンチと、生まれたばかりの太陽と、風だった。

鳥たちがV字の編隊を組んで、どこかへ飛んでいくのが見えた。

彼らは壁を越えて、どこか彼方の世界へ向かっていく。

風はどこまでも健やかで、どこまで美しかった。姿もなく、透明な風が、なぜかとても美しくかった。

第五夜 太陽

ヒトミは目を覚ました。最初、そこがどこなのか分からなかった。自分が誰で、何をして、そしてここがどこなのか、それを理解するのに数秒あるいは数十秒掛かった。シーツの冷たさを感じて、自分が裸であることに気づいた。彼女は起き上がり、そして自分の隣にある抜け殻のようなぬくもりに指を這わせた。昨夜の出来事を思い出し、ヒトミはベッドからするりと出ると、ベッドの脇に脱ぎ捨てられた下着や服を見て、微笑んだ。こみ上げてくる高揚感を押さえ込み、彼女は下着や服を一つひとつ手にとって、寝室を出て、洗濯機の中に放り込んだ。そして新しい下着と服をクローゼットから取り出して、身につけた。鏡に映る自分の姿を見た。年の割に、まだ彼女の躰は美しく均整のとれたものだ。アルゴンが年齢を感じさせない躰を維持するように、彼女もまた、躰に刻み込まれていく容赦ない時間の流れを遅らせようと日々苦勞していた。苦勞のかいがあったか、彼女の躰は美しかった。昨日も、その前も、いつだってアルゴンはそれを褒めた。そう言うときの彼は、素直に自分の思ったことを口にする。自分だけ見ることを許された、アルゴンの優しさ。

ヒトミは服を着て、台所でインスタントコーヒーを淹れると、それを魔法瓶に詰めて部屋を出た。

アルゴンは屋上にいた。まだ真新しい太陽の光は、彼の躰を優しく包んだ。柵にもたれかかり、煙草の煙を空中に吐き出す。右手に紙切れを持っている。ドアが開いたことに気づいて、アルゴンは振り返った。

「やっぱり、ここにいたのね」

ヒトミはにつこりと笑い、魔法瓶を顔の横で振った。

「飲む？」

「ああ」

アルゴンは吸い殻を足下に落とし、靴底で踏みつぶした。

ヒトミはアルゴンに近づきながら、彼の足下をちらと見て「あとで掃除してよね」と笑って言った。アルゴンは「分かってる」とだけ返事をした。ヒトミは魔法瓶の蓋をカップ代わりに、コーヒ―を注いだ。それをアルゴンに渡す。

「悪いな」

「いいえ。どういたしまして」

ヒトミは背中を柵に密着させて、大きく臍を仰け反らせ、青く輝く天空を見つめた。

「これを見せてくれ」

アルゴンは持っていた紙切れをヒトミに渡した。

「何？」

ヒトミは魔法瓶を足下に置くと、アルゴンから紙切れを受け取った。それは手紙だった。几帳面な文字がびっしりと真っ白い紙に詰め込まれている。わずかの歪みもなく、ズレもなく、文字は正確に左から右へ言葉を綴っていた。

「今朝、郵便受けに入っていた」

ヒトミは目で文字を追った。

アルゴンさん、ヒトミさん。このような形で、最後のお別れを言うことになってしまい申し訳ありません。本当ならば、お二人には直接僕自身の言葉で色々なことを説明しなければならいのですが、いくつかの逃れられない事情により、それが出来なくなっていました。なので、このように聊か古めかしい手段とは思いましたが、手紙を書くことにしました。

お二人にはとても感謝しています。僕というとても不安定な存在

を受け入れ、部屋を貸してくれて、そればかりか、常に僕を気遣ってくれて、僕はあなた方に会わなければ生きてることさえ難しかったかも知れませんが。それほどに僕は僕が思っている以上にあらゆることに悩んでいたようです。しかし、それも全て洗い流されるように去っていきました。僕の中の迷いは、今、東の空から昇った生まれたばかりの太陽の光によって、全て消えていったのです。

僕が誰で、そして何をして今まで生きていたのか。それを説明するのはとても難しいし、知ったところでむしろお二人に迷惑を掛ける事になるかも知れないので、ここでは割愛します。僕の仕事は決して人様に誇れるようなものでもないし、自慢出来るようなものでもない。僕はとにかく、お二人に感謝を伝えたかった。そのことを分かってください。

僕を取り巻く状況は、今日の太陽の光によって全てが変わりました。そのせいで、僕は迷いを払拭することが出来ましたが、同時にこの町を去らなければならなくなりました。壁を越え、新たな町で新たな生活をしなければならなくなりました。なので、勝手とは思いましたが、今日、ここを出て行きます。僕の部屋には、ベッドやいくつかの本や、下着や服がまだ残っています。本来ならばそれを全て処分するなりして部屋を明け渡さなければならなのですが、先ほと言ったように僕は逃れられない事情により、なるべく早くこの町を去らなければなりません。なので、本当に申し訳ないのですが、後のことをお二人に託さなければならなくなりました。少ないとは思いますが、お詫びとして多少の現金を置いていきます。それで部屋を綺麗にしてください。

いくら言葉を尽くしても、この感謝を伝えきることは出来ません。僕は今まで、あまりにも言葉を使わなすぎたせいで、その重要さを忘れてしまったようです。お恥ずかしい限りです。

新たな町で、新たな生活をして、お二人のことは忘れません。
新たな町で、新たな生活の中で、お二人の幸せを願っています。

手紙はそこで終わっていた。

「それと一緒に、家賃一年分の現金が入っていた。多少の現金なんて、ふざけた事を」

「それって、多少じゃなくて、たくさん、だわ」

ヒトミは何度も手紙の文面を読み直した。そこに刻まれた、男の痕跡を一つも逃さぬように、注意深く視線を馳せた。

「彼らしい」

コーヒーをすすり、アルゴンは遠くを見た。

「いつかこうなると思ってた。あいつは、俺達の知らない間にきつと消えていくと、そう思ってた」

「私も。彼は、風よ。気がついた時には、もう遙か彼方に行っちゃまっている」

「ああ」

ヒトミは壊れ物を扱うように慎重な手つきで手紙を折りたたんだ。それをポケットにしまい、アルゴンから空の蓋を受け取って自分のためにコーヒーを注いだ。それを両手で包み込むように持ち、立ち上る湯気に息を吹きかけながらヒトミは「そろそろお店、開けないとね」と言った。しかしアルゴンは、両手の指を動かしながら、何かを考えている。ヒトミにはそれが分かったので、彼が言葉を言うまでじっと待っていた。慎重にコーヒーをすすった。

「昨日」とアルゴンが喋り始めると、ヒトミはちらとアルゴンの横顔を見た。朝日を受けて、彼の顔は神々しいまでに輝いてる。

「昨日、インターホンが鳴っただろう」

返事をしなかったが、ヒトミはアルゴンが何の話をしようとしている分かっていた。

「あの時、俺は誰もいなかったと言ったが、本当は違うんだ」

「そう」

「いたんだ」

「そう」

「そいつは、はつきりとした声で、ただいま、って言った」

ヒトミはコーヒーをすすり、飲み口についたコーヒーの残りを指で拭った。

「そいつっていうのは」とアルゴンが話の続きの喋り始めると、ヒトミは魔法瓶を持って歩き始めた。

「お店、開けてるわ」

「ちょっと待て。まだ続きが」

立ち止まったヒトミは、蓋の底で揺れるわずかなコーヒーを飲み干して、アルゴンに向き直った。

「それは、多分、私に話すべき事じゃないわ。きっと、あの子もそう言っただんじゃない？」

「知ってるのか？ 誰が来たか」

「知らない」

ヒトミは悪戯っぽく微笑み、屋上を去っていった。

アルゴンはしばらくその場で立ちつくし、そして、足下で潰れている吸い殻を拾い上げ、脇にある吸い殻入れに投げ入れて、ヒトミの後を追った。

「ただいま」

「……お前、どうして」

「しっ。ダメだよ。お母さんが、気づいちゃうから」

「今、呼んでくる」

「ダメだって。お母さんは、お父さんが思ってるより、ずっと弱くて、ずっと寂しがりやなんだよ？」

「そうだとしても……いや、でも」

「僕はもう行かなくちゃ。もう会えない。けど、最後にもう一度だけ、お父さんに会って、言っておきたいことがあったんだ」

「……」

「お母さんを大切にしてね」

「……ああ」

「それから、あのお兄さん、もういなくなっちゃうと思うけど、許してあげてね」

「……ああ」

「じゃあ、僕、もう行くね」

「いつでも帰ってこい」

「今言ったじゃん。僕、もうここには戻ってこないよ」

「いつでも、帰ってこい」

「……分かった。じゃあ、さよならじゃないね」

「……」

「いつてきます」

「いつてらっしゃい」

開店準備をするヒトミ。アルゴンは遅れてやってきて、エプロンを着けた。

「後は俺がやる。お前は外を」

「そう。じゃあ、よろくね」

ヒトミはカウンタでアルゴンとすれ違い、客席を通ってドアの鍵を開けた。そして、外に出た。

眩しい日差しが、日常の到来を予言するように輝いていた。カオリがこちらにやってくるのが見えた。ヒトミは片手を挙げて、彼女を迎えた。

「あれ？ どうしたんです」

「ちよつとね」

カオリは窓から店の中を覗き込み「アルゴンさんもいるんですか？」と言った。

「ええ」

ヒトミはそう返事をしたものの、まだ青空に釘付けになっていた。漂う雲はどこまでも白く、抜き抜ける風は生き物の息吹をどこからか運んできていた。

「どうしたんです？　ちょっと変ですよ？」

「そんなことないわ。さ、今日も一日、よろしくね」

「え、ええ」

カオリはどことなく困惑しながら、けれどヒトミのあまりに屈託のない微笑みに、釣られて笑った。

「おはようございます」とカオリはドアを開けて、カウンタの中にいるアルゴンに挨拶をした。

ヒトミはまだ、自然のもたらす数々の奇跡の中に身を委ねていた。しばらくそこでじっとしていた。

そして何かを決意したかのように短く息を吐いて、店の中に戻っていった。

ドアが閉まった。

ダイナー「ムーン・ナイト」は、これから訪れる朝の喧噪に向けて準備を始めた。

町は、日常を取り戻したのだ。ずっと忘れていた、本当の日常を取り戻したのだ。

エピソード

男はソフィと共に、町の入口にいた。銀色の鞘を杖のようにつき、ソフィに腕を引かれて男は歩いていた。ソフィが足を止めたことに気がつき、男も立ち止まる。

彼らを待ち受けるように、彼らの目の前には、監視人が立っていた。これほどの朝日の中で、しかし監視人の周囲には宿命的な闇が漂っていた。

「残念です。あなたのような有望な戦士が、このような道を歩んでしまうとは」

男はどこか全く別の場所に視線を向けたまま、それとなく微笑んだ。

「油断していました。もっと、容赦なく、確実な洗礼を施すべきだった。一生の不覚です。有能な戦士であればあるほど、洗礼は確実に行う必要があった」

「『壁』は消えました。戦士として、やるべきことはやった。とやかく言われる覚えはありません」

「そうはいきませんよ。あなたは我々は裏切った。我々は戦士と『剣』を失い、あなたと彼女は心を取り戻した。こんな不公平がありますか？ 我々は失い、あなた方は手に入れた。これを不公平と言わずに何と言いましょ」

「僕は代わりに眼を失いました。これでおあいこでしょ？」

「当然の報いです」

ソフィは男の腕を引いて、監視人の横を通り過ぎて行った。監視人は彼らを追うことも、視線を向けることもせずその場でじっとしていた。

「あなたは光を受け入れ、誇らしげに思っているかも知れない。今はそれでもいいでしょう。けれど、忘れないでください。我々は、あなたをずっと見ていますよ。そしてあなたは、いつか必ず、手に

入れた光におぼれ、その光が心を焼き、死んでいく。無惨に、情けなく。その時、必ずあなたは後悔します。光なんて手に入れるんじゃないかったと」

「それが本来の人の生き方です」

「後悔することが、ですか？」

「不可欠な要素です」

「言っておきますが、あなたは人ではない。そして戦士でもない。中途半端な存在です。そんな者が、人生やらなにやらについてとかく語るのは止めていただきたい」

「分かりました。でも、一つ言わせてください」

男が立ち止まると、監視人に向かって振り向いた。閉じられた両目を開き、瞳の消えた真つ白な眼で監視人を睨み付けた。何も見えないはずのその目は、しかし間違いなく監視人の目を見据えていた。「中途半端ではない、ということに、どれだけの意味がありますか？」

そして男は微笑んだ。監視人にも分かるように微笑んだ。

「あなたの笑顔なんて見たくもない」

「だから、笑ったんですよ」

去っていく男の足音。

監視人は、帽子の位置を直し、歩き始めた。

両者は背を向けて遠ざかっていく。

男の右手には金色の『刃』が収められた白銀の鞘が握られていた。そして隣にはソフィがいた。ソフィは純白のワンピースに身を包んでいた。彼女の黒い髪の毛は、男の宿命的な白い頭髮とは対称的に、太陽の光を受け、美しく輝いていた。

男は、心に光と闇を持ち、人であり戦士であるという不安定さを受け入れた。

遠ざかる彼らが、町を振り返ることはなかった。

この世には、光と闇がある。それは、時に陰をもたらし、あるいは陰を取り去る。朝と夜という時間の流れもまた、光と闇の一つの姿である。

しかし、知っておかなければならないことがある。

光と闇は決して善と悪ではない。どちらにも善があり、どちらにも悪がある。

人は時に光を善とし、闇を悪とする。

だが心はそれが違うことを初めから知っている。

なぜなら心には、初めから光と闇があり、初めから善と悪があるからだ。

光と闇は単なる姿でしかない。

それを理解したとき、人は本当の意味で、善悪を理解出来るようになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6706m/>

MOON (k)NIGHT

2010年10月8日13時24分発行